

## 飯田町の小字名の意味・由来

1. 小字名は『下伊那地名調査』(市村威人編 下伊那教育会所蔵 1958)による。
2. 呼び方は『明治初期長野縣町村字地名大鑑』(滝澤主税編著 長野県地名研究所 1987)を参考にした。

### 【茶畑田中】

チャバタタナカ。

何ヶ所にもある数の多い小字。多くは緩傾斜地にあるが、一部は斜面のところもある。

チャバタタナカとは何を意味するのか。二説を挙げる。

①チャバタタナカとは、字面の通りに解釈すれば、「茶畑もある水田の多いところ」をいうのであろう。建物が多いため確認は難しいが、茶畑のあるところもあり、田んぼも割合に多い。

②チャーチ(千)・ヤ(菴)と転じた語で、タナカはタナ(棚)・カ(「場所」の接尾語)と考える(語源辞典)。以上から、チャバタタナカとは「湿気っぽい畑地で棚状になっているところ」とする。どうであらうか。

チャバタタナカ地名は、むろん全国地図には記載がない。

### 【田中】

タナカ。

この小字は、チャバタタナカと組むようにして接している。対になっているのは、それなりに理由がありそうだが、わからない。

タナカ地名は全国的にも多く、2.5万分の1地図には、339ヶ所が中・大字として挙げられている。

タナカとは何か。二説を挙げておきたい。

①タナカとは、文字通りで「水田地帯に

ある土地」をいうのであろう。現在は、殆どが建物で埋められているが、かつては水田であったことは十分に考えられる。

②タナカはタナ(棚)・カ(接尾語)でカは「場所」を示す(語源辞典)。従って、タナカとは、「棚状の土地」とすることもできそうである。殆どが緩い傾斜地になっている。

### 【王龍寺】

オオリョウジ。

丸山小学校の校地にもあり、合計三ヶ所にこの小字はある。丸山小学校は王龍寺川に接している。

『丸山誌』によれば、「大龍寺」と書いてオオリョウジと読むのが正しいという。正保二年(1645)には大龍寺が存在したことは確認できる(下伊那史第七巻)が、明暦元年(1655)には「おおりやうじ」の名で地名化していたらしい。

その位置は明確にはわからないが、通称小字「土井」とその周辺をいくつかの文献が示唆しているという。その小字ドイが、今回の小字図では、この付近には見当たらない。しかし、丸山小学校校地のオオリョウジ小字の南側にあるオオリョウジ小字の位置がその場所ではないかと思われる。

### 【チマイ】

この小字は、オオリョウジ小字の西隣にある。大きな小字とその更に西側にある小さな小字の二ヶ所になっている。

チマイとは何であろうか。チマイ←チンマイで形容詞「小さい」の意になるが、何が小さいのか、地名になるような由来には繋がらない。チマイ←チマイ(千枚)に通じるが、地名にはなりにくい。

では、チマイとは何を意味するのか。二説を挙げてみたい。

①チはフチ(扶持)の上略形で(語源辞典)、マイはマイ(米)のこと。チマイと

はフチマイ（扶持米）のことかもしれない。つまり、「扶持米を主に作っていた田んぼのあった所」と考えるのはどうであろうか。中世、土地の給与に代わって米を給与することが起こり、近世に一般化した。諸藩の場合も、下級藩士に多く支給されていた。これが扶持米である（国語大辞典）。実際にこうした水田があったのかどうかは未確認。

②子音間の語形交替でサ行→タ行への変化もあるという（国語学大辞典）。とすれば、シマイ→チマイの変化も考えられるのではないか。シマイとはシマイ（仕舞）で「化粧。身じまい」をいう（国語大辞典）。以上から、仏事の中に舞が行われたこともあったと考えたい。隠岐島にあったという葬祭神楽のように死者を成仏させ悪霊を退散させる舞が、かつてこの地方にもあったということは考えられないであろうか。

2. 5万分の1の全国地図には、チマイ地名は記載が無い。

#### 【チマイ南田】

チマイミナミダ。

チマイ小字の南隣に接している小さな小字である。

チマイミナミダとは、「チマイの近くにある土地（あるいは水田）」をいみするのであろう。

#### 【腰前】

コシマエ。

この小字は、チマイ小字の西隣にあって、源長川右岸にある。

コシマエとは何を意味しているのか。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①コシは「麓」をいう静岡県の方言。つまり、コシマエとは「麓の手前の土地」をいう。王龍寺の手前であるという意味も含まれているかもしれない。

②コシは動詞コス（越）の連用形が名詞

化した語で、「越す所」をいう。すなわち、コシマエとは「川を越える手前のところ」をいうのかもしれない。川というのは北側の源長川のことか、あるいは南側の円悟沢川のことか、はっきりしない。

全国地図には、コシマエ地名は三ヶ所に中・大字として挙げられており、その全てに「越前」の字が宛てられている。

#### 【ミウチ畑】

ミウチバタ。

この小字はコシマエ小字の西隣にあり、源長川と円悟沢川の間にある。

ミウチハタとは何か。二説を挙げる。

①ミはミズ（水）の下略形で、ウチはフチ（縁）から転じた語（以上は語源辞典）。従って、ミウチバタとは「沢の縁にある畑」を意味するのかもしれない。

②ミウチはミウチ（御内）で「譜代の武士」をいう（広辞苑）。ミウチバタとは「飯田藩の譜代の家臣の屋敷であった畑」をいうのかもしれない。

全国地図には、ミウチバタ地名の記載は無い。

#### 【沢】

サワ。

この小字は、源長川に沿った右岸の羽場町3丁目にあり、対岸が白山町3丁目になっている。

サワとは「山間の比較的小さな谷川」（広辞苑）であるが、この小字が生まれたときには「低くて水がたまり、蘆・荻などの茂った地」（広辞苑）であったのであろうか。

全国地図には、サワ地名は61ヶ所に中・大字として挙げられている。

#### 【沢渡】

サワド。

この小字は曙町にあり、円悟沢川の兩岸にまたがっている。

サワドとは何か。語源辞典によりなが

あ三説を挙げる。

①サワドはサハ(沢)・ド(処)で「沢が流れてるところ」(語源辞典)をいうのであろうか。単純にすぎるか。

②サワドとはサワ(沢)・ワタリ(渡)の一部音読したものか(語源辞典)。とすれば、サワドとは「沢を渡った場所」ということになる。街道があって、円悟沢川の渡河点になっていたのかもしれない。

③ドは擬音語かもしれない。すなわち、サワドとは、「ドドという川音が響く場所」であることも考えられる。

全国地図には、サワド地名は、中・大字として5ヶ所が記録されている。

#### 【砂上場】

スナアゲバ。

この小字は、源長川と円悟沢川に挟まれて、二ヶ所に分布している。

スナアゲバとは何か。二説を挙げる。

①スナアゲバとは字面の通りで、「谷川に堆積する土砂を上げた場所」であらうか。この小字の発生時には、すでに谷川は蛇行しないように川岸が整備されていたのであろうか。

②可能性は少ないかもしれないが、地震による液状化現象が起きていた場所かもしれない。千代の「地震崩れ」小字発生の時かもしれない。享保三年(1718)の遠山地震であらうか。「伊那遠山谷で山崩れ、せき止められた遠山川が後に決壊し、死50余。飯田長久寺の唐門倒れた」(平成25年4月12日理科年表)とある。

全国地図には、スナアゲバ地名は記載が無い。

#### 【笠田】

カサダ。

この小字は飯田病院の南側にあり、源長川右岸になる。源長川に面したところは、ちょっとした高みになっている。

カサダとは「少し高くなった所(ある

いは水田)であらう。笠に見立てた地形をいうのであらうか。

全国地図には、なぜかカサダ地名は一つも記載が無い。

#### 【小箕瀬】

コミノゼ。

この小字は、広いミノゼ小字の西側にある。

コミノゼとは何を意味するのか。コ(小)はほとんど意味を持たない接頭語(語源辞典)か、「小さい」をいうのであらう。ミノゼについても二説を挙げるができる。一つは地元には伝えられている「ミノゼは美濃から移りすんだ人達の多かった所だから“美濃勢”から転じた地名だ」という説。この説は明快でこの通りかもしれないと思いつつも、ミノゼはミ(美称の接頭語)・ノゼ(傾斜地)ではないかという説も捨てきれない。ノゼ=傾斜地は下伊那で使われているという(語源辞典)。

以上を総合して、二説を挙げておきたい。

①コミノゼとは「大きなミノゼに対して、狭い方の美濃の商人を中心とした移住民の多かったところ」を意味する。

②コミノゼとは「緩い傾斜地になっているところ」をいうのかもしれない。

全国地図には、コミノゼ地名は載っていない。

#### 【彦右衛門田】

ヒコエモンダ。

飯田線の東西に、二ヶ所、この小字はあるが、東側のヒコエモンダの方が、西のよりもかなり広い。

ヒコエモンは固有名詞であらう。ヒコエモンダとは「彦右衛門所有の土地」を意味するものと思われる。

#### 【四ツ田】

ヨツダ。

この小字は、ヒコエモンダ小字の西隣にある。

ヨツダとは何か。二説を挙げておきたい。

①ヨツダとは文字通りで、「四枚の田んぼがあったところ」であろうか。もちろん、小字名発生時のことである。

②ヨはヨ（余）で「余所」の意（方言大辞典）、ツは助詞ノの古語。従って、ヨツダとは、「耕作者が村内ではなく余所の村から来て耕している水田のあった所」かもしれない。

ヨツダ地名も全国地図には記載されていない。

#### 【膳六】

ゼンロク。

ヨツダの南隣にある、小さな小字である。

ゼンロクとは何か。二説を挙げる。

①ゼンロクは固有名詞である可能性は高い。であれば、ゼンロクとは「ゼンロクさんの宅地か耕作地があったところ」となる。しかし、彼がどんな人であったのかは全くわからない。

②ゼンロクはゼンロク（禅録）であった可能性は、全くないであろうか。禅録とは「禅宗に関する記録類。禅林の語録類」であるという（国語大辞典）。従ってゼンロクとは「禅録が保管されていた建物のあったところ」であろうか。可能性は小さいかもしれない。

全国地図には、ゼンロク地名は、全く記載が無い。

#### 【町張】

マチハリ。

この小字は松川の谷に近いところにある。現在は建物が密集しているが、マチハリは何を意味しているのだろうか。

マチにもハリにも建物が密集していることをいう場合と人の手が余り入ってい

ないことを意味する場合の正反対の解釈が成立しそうである。この小字成立時には寂しいところであったのか、あるいは逆に賑やかなところであったのか。判断に迷う。

マチハリとは何か。思い切って語源辞典によりながら二説を挙げる。

①マチは「区画された田地」で、ハリはハリ（墾）で「開墾地」のこと。従って、マチハリとは「開墾して区画されている田地」ともとれる。

②マチは「建物が集まっているところ」をいい、ハリはハ（端）・リ（「場所」を示す接尾語）である。つまり、マチハリとは「建物が集まっている場所で段丘の先端部」をいうのかもしれない。

マチハリ地名は伊那谷には多いが、全国地図にはマチハリ地名は記載されていない。

#### 【畑田・西ノ畑田】

ハタダ・ニシノハタダ。

ハタダ小字は白山通り一丁目付近に二ヶ所あり、ニシノハタダ小字はマチハリ小字の南に接しており、段丘の先端部で松川溪谷の崖地も含んでいる。

ニシノハタダとは何か。二説を挙げる。

①ハタダは、タハタとなっていないので、「田と畑」ではないだろう。ハタ（畑）・ダ（処）で、「畑になっている所」をいうのであろうか。従って、ニシノハタダとは、「西の方にある畑地」をいうか。ニシは飯田城の西の方をいうものと思われる。この小字の北西側にハタダ小字があるからである。

②ハタダはハタ（端）・ダ（処）か。とすれば、ハタダとは「飯田の段丘の先端部」を意味し、ニシノハタダとは、「飯田の段丘の西の方の先端部」をいうのであろうか。

2. 5万分の1の全国地図には、ニシ

ノハタダ地名は載っていない。

#### 【松高】

マツタカ。

これも松川溪谷に近い段丘の先端部に二ヶ所あり、いずれもJR飯田線に沿っていて松川溪谷の段丘崖に近い。

マツタカとは何か。語源辞典に依りつつ三説を挙げる。

①タカには「限度。限界」の意があり「台地の端」をいう。すなわち、マツタカとは、「アカマツが自生している段丘の先端部」をいうか。

②マは単なる接頭語か、「程度の甚だしい」意の接頭語、ツタは古語ツタギルから「崖」をいい、カは「処。場所」を示す接尾語。以上から、マツタカとは、「険しい崖のあるところ」をいうのかもしれない。

③マツは動詞マツハル（纏）から「巻いたような地形」をいい、タカは「高い所」のこと。以上から、マツタカとは「(崖の下からみて)巻いたような地形になっている段丘の先端部」という意味にもとれそう。

全国地図には、マツタカ地名も記載が無い。

#### 【新三田】

シンゾウダ。

飯田の段丘の南部にあり、マツタカ小字の西隣にある。

シンゾウダとは何か。二説を挙げたい。

①シンゾウを固有名詞とするのが、無難な解釈であろうか。つまり「シンゾウさんの所有地」か。居住地があったのか、田んぼであったのかはわからない。

②西隣の緩傾斜地上流側にヒエダ小字があることから、田んぼであった可能性も否定できない。ヒエダの水を引いて水田にしていたことも考えられる。シンゾウとはシンゾウ（新造）で「新しくつくること」（国語大辞典）をいう。以上から、

シンゾウダとは「新しく開かれた水田」かもしれない。やや怪しげな解釈か。

全国地図には、シンゾウダ地名もシンゾウタ地名も載っていない。

#### 【ヒエ田・ヒエ田】

ヒエタかヒエダ。

この小字は白山通り一丁目にあり、シンゾウダ小字とハタダ小字に挟まれている。また、羽場仲畑付近にも二ヶ所ある。

ヒエタとは何か。二説を挙げる。

①ヒエタとはヒエタ（稗田）か。「田稗を植えていた田んぼ」を意味する。田稗は水温が低く稲の生育のよくない水口などに栽培されていた。近世以降、肥過田の調整田として有効に利用されてきたが、畑稗の栽培が多くなり、また稲作技術の発達により田稗の栽培技術は消滅しつつあるという。（以上は民俗大辞典）

②ヒエタはヒエタ（冷田）で、「水温の低い田んぼ」をいうことがあったかもしれない。井水が通っていない頃には自然の湧水を使った田んぼであったと思われる。その頃の田んぼが地名に残っていたと考えることもできそう。

全国地図には、ヒエダ（タ）地名は中・大字として35ヶ所に挙げられており、「稗田」の字が26ヶ所に、「冷田」の字が3ヶ所に挙げられている。

#### 【羽場】

ハバ。

飯田の段丘の南部に数カ所、この小字はある。

ハバとはハバ（岨）で、「傾斜地。崖」をいう（国語大辞典）。ハバを方言としている地域は、群馬・山梨・信濃・岐阜と多い。現地をみると、緩傾斜地でも崖に近い所にハバ小字がある。従って、ハバとは「崖地ないしは崖地に近いところ」をいうのであろう。平らなハバはかつては崖とも繋がっていたが、新しい小字の発

生により、その後に切り離されているのかもしれない。

全国地図には、ハバ地名は40ヶ所の中・大字として挙げられている。

#### 【サイノ神】

サイノカミ。

この小字は、源長川右岸の沿岸にある。

サイノカミ=サエノカミで「邪霊の侵入を防ぐ神。行路の安全を守る神。村境などに置かれ近世にはその形から良縁・出産・夫婦円満の神ともなった」(広辞苑)という。

かつては、ここも村境であったのであろうか。

全国地図には、サイノカミ地名は29ヶ所の中・大字として挙げられている。

#### 【清五田】

セイゴダ。

源長川の近くでその右岸にある。

セイゴダとは何か。三説を挙げたい。

①セイゴ←セイコと濁音化した語。セイコはセ(瀬)・イ(井)・コ(処)で、セイゴダとは「瀬になった川の近くの田んぼ(あるいは所)」を意味するのであろうか。(語源辞典による)

②セイゴ←セゴと転じたもので、「小路」をいう(語源辞典)。従って、セイゴダとは「小路になっている所」をいうのであろうか。

③セイゴはもしかしたら、固有名詞化もかもしれない。とすれば、セイゴダとは「セイゴさんの田んぼ(もの)」をいうのかもかもしれない。

全国地図には、セイゴダ地名は無い。

#### 【トウテイ】

白山通り二丁目にある、小さな小字で二ヶ所にある。

トウテイとはトウテイ(塘堤)で「つつみ」のこと(国語大辞典)。かつては堤のあったところと思われる。現在は町場

になっていて、堤は見えない。

全国地図には、トウテイ地名は記載が無い。

#### 【井下】

イシタ。

白山通り一丁目にある、小さな小字である。

イシタとは、字面の通りで「井水の流れている、その下側」をいうのであろう。この井水は、はっきりしないが、円悟沢井であろうか。

全国地図には、イシタ地名は、2ヶ所の中・大字として挙げられているが、宛てられている字は、二つとも「石田」。

#### 【ゴケ畑】

ゴケバタ。

飯田の段丘の南西端にある小字。

ゴケバタとは何か。ゴケ←コケと濁音化したもので、コケは動詞コク(倒)の連用形で名詞化した語で「崩れ落ちたような地形」をいう(以上は語源辞典)。バタはハタ(端)かハタ(畑)であるが、どちらかは判断がつかない。

以上から、ゴケバタとは「崩れ地の近くの場所」をいうか、あるいは「崩れ地の近くの畑」を意味するものと思われる。

全国地図にはゴケバタ地名は載っていない。

#### 【ササラギ】

この小字も、谷川溪谷の崖っぷちにある。

ササラギと動詞ササラグ(古くはササラク)の連用形の名詞化した語で「流れる水がさらさらと音をたてる」(広辞苑)こと。崖の上になるが、松川の川音が聞こえる場所であったのだろう。

全国地図には、ササラギ地名も記載が無い。

#### 【アマツチ】

この小字は、源長川右岸に二ヶ所ある。

アマツチとは何をいうのであろうか。二説を挙げておきたい。

①アマツチとは「耕作に適した土の層」(国語大辞典)をいう。ただ、京都の方言であることが気になるが、京都との交流もあったことも考えられるので挙げておきたい。以上から、アマツチとは「耕作に適した土地」を意味するのであろうか。

②アマはア(水)・マ(間)で「湿地」をいい、ツチは転じて「泥」さらに「湿地」を意味する。類語を重複させたもので、アマツチとは「湿地」をいうのかもしれない。

全国地図には、アマツチ地名は記録されていない。

#### 【ヲトリ田】

オトリダ。

この小字は源長川に近く、その右岸にあり、三方をアマツチ小字に囲まれている。

オトリダとは何を意味するのか。二説を挙げる。

①オトリは動詞オトルの連用形が名詞化した語で「価値が低いこと」をいう(国語大辞典)。従って、オオトリダとは「収量があまり多くない田んぼ」をいうのだろうか。三方がアマツチで耕作にはいい土壌になっているということであれば、少しは気になるがあり得ないことではない。

②オトリはオト(音)・リ(「場所」を示す接尾語)で、「音響」による地名(語源辞典)。つまり、オトリダとは「川音が聞こえてくる田んぼ(ところ)」を意味するか。川は源長川のこと。

全国地図には、オトリダ地名は載っていない。

#### 【内垣外】

ウチガイト。

この小字は白山通り二丁目にあり、周辺の小字より大きい。

ウチガイトとは何であろうか。ウチは「身内とか縁者」をいうのであろうか。とすれば、ウチガイトとは、「身近な縁者たちの屋敷があった所」をいう。

全国地図には、ウチガイト地名も記載が無い。

#### 【ボタ上・ボタ下】

ボタウエ・ボタシタ。

白山通り二丁目ボタウエ小字が一ヶ所あり、ボタシタ小字は白山通り三丁目に二ヶ所ある。

ボタとは下伊那郡や愛知県北設楽郡の方言で「田畑の畦」をいう(国語大辞典)。

ボタウエとは、「田畑の畦の上流側にある土地」をいい、ボタシタとは「田畑の畦の下流側にある土地」であろう。

全国地図には、ボタ地名もボタウエ地名・ボタシタ地名も記載されていない。この地方の方言であるためであろうか。

#### 【南田】

ミナミダ。

この小字は羽場町三丁目と白山通り二丁目の二ヶ所にある。

ミナミダとは「南の方にある田んぼ(土地)」であろう。方角の基準になっているのは「飯田の段丘の南部」をいうのか、寺社・有力者が基準になっているのか、はっきりしない。

全国地図には、ミナミダ地名は、15ヶ所に中・大字として挙げられており、そのすべてに「南田」の字が宛てられている。

#### 【垣外】

カイト。

何ヶ所かに、この小字はある。

カイトとは「有力者の屋敷のあったところ」であろうか。

この地方には、どこにでもある小字で

あるが、全国地図になると8ヶ所が中・大字として挙げられているにすぎない。カイト地名は伊那谷特有の小字名といってもいいのではないだろうか。

#### 【カジヤ】

白山通り二丁目に2ヶ所あり、松川溪谷の崖地に近い。

カジヤとはカジヤ(鍛冶屋)であろう。鍛冶屋とは「鉄を打ち鍛えて刀剣・刃物・馬具・農具・釘などを製作し、あるいは修理にあたる職人の総称」(民俗大辞典)であるという。城下町であり、しかも寺社が多く、鍛冶屋に対する需要の多い地域であったのであろう。

異の風を受けやすい土地でもある。

以上から、カジヤとは「鍛冶職人がいて作業場もあった所」であろうか。

全国地図にもカジヤ地名は多く、82ヶ所に中・大字として挙げられ、うち「鍛冶屋」「家治屋」の字が宛てられているのは53ヶ所になる。

#### 【カジヤ畑田】

カジヤハタダ。

白山通り二丁目にある小字である。

カジヤハタダとは、「鍛冶職人が耕作していて免租されている畑」をいみするのであろうか。

全国地図には、むろん、カジヤハタダ地名は記載が無い。

#### 【カシヤ】

白山通り二丁目の松川溪谷の崖縁にある。

カシヤとは何か。二説を挙げる。

①カシヤ←カジヤと清音化したもの。近くにはカジヤ小字もある。従って、「鍛冶職人の作業場・居住地であったところ」か。

②近世には庶民にも菓子屋に対する需要が広がっていたという。カシヤは「菓子屋の製造場や店のあったところ」である

うか。

全国地図には、カシヤ地名は2ヶ所に中・大字として記載があるが、宛てられている字は2ヶ所とも「柏谷」となっている。

#### 【井マタギ】

イマタギ。

この小字は、白山通りの飯田の段丘最南端で、松川溪谷の崖縁にある。

現在でも、この小字を二本の井水が流れている。

イマタギとは「井水を跨いでいる土地」をいうのであろう。

全国地図には、イマタギ地名は記載が無い。

#### 【大塚】

オオツカ。

この小字は、白山通り三丁目の松川溪谷崖縁にある。

オオツカのオオは美称の接頭語か。オオツカは「土石が積み上げられているところ」をいう。

土石が積み上げられているのは古墳なのか、それとも耕作に邪魔になる小石などを拾って積み上げたものなのかどうかは、はっきりしない。

全国地図には、オオツカ地名は110ヶ所にも中・大字として挙げられている。

#### 【前田・前畑】

マエダ・マエバタ。

マエダ小字は十五ヶ所以上、マエバタ小字は四ヶ所ほど分布している。

マエダとは「前の方にある田んぼ(土地)」をいい、マエバタとは「前の方にある畑」をいう。

マエの基準になるのは、有力者の屋敷や寺社・城である。それぞれの小字にとって、マエはそれぞれことなる基準を持っていることになる。

これらの地名は、全国地図にも多く採



られており、マエダ地名は139ヶ所、マエバタ（マエハタ）地名は19ヶ所が中・大字として挙げられている。

#### 【それ田・そり田】

ソレダ・ソリダ。

いずれも白山通りの松川溪谷の崖に近いところにある。

ソリもソレもゾレと同じく「崩崖」などをいう（語源辞典）。イ段からエ段への母音変化は、特に中世には目立って多かったらしい（国語学大辞典）。

従って、ソレダもソリダも同じように「崩崖の近くにある土地（田んぼ）」を意味するものと思われる。

ソリ、ソレは焼畑も意味しているが、この地で焼畑は考えにくい。

全国地図には、ソレダ地名とソレタ地名は載っていないが、ソリタ地名は4ヶ所に中・大字として挙げられており、いずれも「反田」の字が宛てられている。

#### 【常玄畑】

ジョウゲンバタ。

白山通り二丁目にある小字で、松川溪谷も近い。

ジョウゲンは固有名詞であろうか。とすれば、「ジョウゲンさんの所有する畑」ということになるがどうであろうか。

全国地図にはジョウゲン地名が1ヶ所にだけ、中・大字として挙げられており、「浄玄」の字が宛てられている。これも固有名詞が地名化したものであろうか。

#### 【カゴタ】

この小字は、白山通りの松川溪谷の崖際に二ヶ所ある。

カゴタとは何か。カゴは古語コゴシ（凝）の語幹コゴの転訛した語で「けわしい地形」をいう（語源辞典）。従って、カゴタとは「険しい地形の近くにある土地（田んぼ）」をいうのであろうか。

なお、カゴ←カコの濁音化で、カ（欠）・

コ（処）とする考えもあり（語源辞典）、この場合も「崩崖」などを意味する。

全国地図には、カゴタ地名は2ヶ所に中・大字として挙げられている。

#### 【カゴ田】

カゴタ。

この小字は先のカゴタ小字の北西側の恵光寺のすぐ南隣にあり、松川溪谷の崖地からはやや離れているが、先のカゴタと由来は同じであろうと思われる。かつてのカゴタ小字は広く、その間に新しい小字が発生して、カゴタ小字はばらばらになっているのであろう。

#### 【カマタ】

この小字も白山通り三丁目にあり、二ヶ所のカゴタ小字に挟まれている。

カマタとは何か。二説を挙げる。

①カマは「えぐったような崖地」をいう（語源辞典）。従って、カマタとは「崖地に近い水田（土地）」をいうのか。

②岐阜では「泉」のことをカマという（国語大辞典）。繋がり不明。とすれば、カマタとは「泉が出ている場所（田んぼ）」ということになるが、飯田の段丘の末端部にあり、あり得ない話ではない。

全国地図には、カマタ地名は28ヶ所に中・大字として挙げられており、うち16ヶ所には「鎌田」の字が宛てられている。

#### 【藤乃木】

フジノキ。

この小字は、カゴタ小字の北隣になる白山通り三丁目に一ヶ所と羽場権現の南東側に二ヶ所の、合計三ヶ所にある。

フジノキとは何か。語源辞典に依りながら三説を挙げる。

①素直に解釈すれば、「目立った藤の樹があったところ」であろうが、この例は少ないという。

②フジ←フチ（縁）と転訛した語で、「段

丘の縁」をいう。ノキは伊那郡・水窪の方言だといわれ、「家の裏手の土地」を意味する。すなわち、フジノキとは「家の裏手が段丘の縁になっているところ」をいうのであろうか。

③ノキ←ヌキ（抜）と転じたもので、「崩崖」のこと。フジノキとは「崩崖に近い土地」をいうのかもしれない。羽場権現の南東側には傾斜地がある。

全国地図には、フジノキ地名は31ヶ所に中・大字として挙げられている。

#### 【ハザバ】

この小字は白山通り二丁目にあり、現在も水田や畑地がある。

ハザバとは「稲かけを設備してある場所」（国語大辞典）をいう。中部地方に多い方言であろうか。

稲干場は伊那谷南部では、イナバ小字になっている所が多い。ハザバはむしろ珍しい。単に草原に稲を並べて干すだけでなく、稲架（はざ）を作って干すという手法は新しい。旧村部に比べて、飯田町周辺の稲作は進んでいたということであろうか。

全国地図には、なぜか、ハザバ地名もハサバ地名も記載されていない。

#### 【大畝町】

オオセマチ。

この小字は、羽場二丁目と白山通り二丁目にある。

オオセマチとは何を意味するのか。オオセ←オオゼ（大背）で「大きな背中」をいう（国語大辞典）。マチは「集落の小区画」か。以上から、オオセマチとは、「少し高くなった土地にある集落の小区画」とうことになるか。比較的新しい小字であろうか。集落が形成されるほどに。

マチには「水田の区画」をいうこともあるが、「少し高い土地に水田」という地形は書きにくいので、採り挙げないこと

にした。

全国地図には、オオセマチ地名は一ヶ所にだけ中・大字として挙げられているが、宛てられている字は「大瀬町」となっている。

#### 【本畑】

ホンバタ。

この小字は白山通り二丁目にあり、現在でも畑や田んぼがある。

ホン（本）は何を意味するのか。「本田」という地名がある。「租税を徴収する田地として検地帳に記載されている耕地」であるという（広辞苑）。であれば、ホンバタとは「検地帳に記載されており、租税の対象になっている耕地」ということになる。ここで改めて租税対象になっていることを、なぜ小字名にしなればならなかったのかは、よくわからない。

全国地図には、ホンバタ地名は1ヶ所が中・大字として挙げられている。宛てられている字は「本畑」。

#### 【井戸尻】

イドジリ。

白山通り二丁目、円悟沢川右岸の沿岸にある。

イドジリとは何を意味しているのか。語源辞典に依りながら二説を挙げたい。

①ジリ←シリと濁音化した語で、シリはシリ（後）で「後方。背後」のこと。イドジリは井（井）・ド（処）・ジリ（後）で、「流水の背後にある土地」をいう。

②ジリは形容詞ジルの略で「水気の多い状態」すなわち「湿地」を示す。従って、イドジリとは「流水の近くにある湿地」をいうのかもしれない。

全国地図には、イドジリ地名は5ヶ所に中・大字として挙げられており、いずれも「井戸尻」の字が宛てられている。

#### 【茶畑】

チャバタケ。

この小字は白山通り二丁目の円悟沢川右岸にあり、南東に緩く傾斜している。

チャバタケとは字面の通りで「茶畑のあったところ」であろうか。日当たりのいい南東向きの緩傾斜地で、茶が栽培されていたのであろう。

全国地図には、チャバタケ地名は9ヶ所、チャバタ地名は1ヶ所が中・大字として挙げられている。

#### 【サイトリ】

白山通り二丁目のチャバタケ小字に囲まれた小さな小字である。

サイトリとは何か。国語大辞典に依りながら考えていきたい。

サイトリには「左官の助手で漆喰や壁土を才取棒に載せて、足場の上にいる左官に差し出す役の者」という意味があるが、小字発生当時、左官と別に名づけるほどに左官職が分化していたのかどうか。疑問が大きいので、ここでは採らないことにした。

ではサイトリとは何か。二説を挙げる。

①サイトリ←サントリとイ音便化した語で、「刺捕竿で鳥をとらえること。また、その人」をいう。従って、サイトリとは「刺捕竿で鳥を捕らえていた人が住んでいた場所」であろうか。こうした副業をしていた人がいてもおかしくはないであろう。

②サイトリ←スアイトリと転じた語で「売買の仲介をして口銭を得ること。また、それを業とする人」をいうこともある。すなわち、サイトリとは「売買の仲介を業とする人が住んでいた所」をいうのかもしれない。

全国地図には、サイトリ地名は載っていない。

#### 【竹腰】

タケコシ。

この小字は白山通りと羽場町四丁目の

二ヶ所にあり、いずれも街道に面している。現在でも住宅の他に田んぼや畑地がある。

タケコシとは何をいうのであろうか。分かりにくい小字である。それでも語源辞典に依りながら、二説を挙げたい。

①タケコシとは「竹藪の傍の地」をいうのであろうか。あるいは、ここでは竹製品の製造販売が行われていたかもしれない。

②タケは「信仰と関係ある山の称」であり、コシは「麓」のこと。すなわち、タケコシとは、「白山権現を祀る権現山の麓」を意味することも考えられる。

全国地図にはタケコシ地名は記載されていない。

#### 【水上】

ミズカミ。

羽場町四丁目で円悟沢川右岸にあり、小字内には恵光寺がある。

ミズカミとは何か。これも語源辞典に依りつつ二説を挙げる。

①ミズカミとはミズカミ（水神）で「自然湧水のあるところ」であろうか。権現山の山麓で泉の存在は十分に考えられる。

②ミズカミはミナカミと同じく「河川の源流」を意味する。ここでいう河川は円悟沢川を指す。

全国地図にはミズカミ地名は中・大字として39ヶ所が記載されており、うち37ヶ所に「水上」の字が、2ヶ所に「水神」の字が宛てられている。

#### 【中縄手】

ナカナワテ。

この小字は羽場町四丁目に三ヶ所ある。ナカナワテとは何か。二説を挙げる。

①ナワテとは「まっすぐな長い道」をいう（広辞苑）。ナカナワテとは、何本かある真っ直ぐな道の中で「真ん中にある真っ直ぐな道になっているところ」を意味

するか。

②ナカーナガと清音化した語で、ナワテは「田の間の道」(広辞苑)をいう。つまり、ナカナワテとはナカナワテ(長縄手)で「長く続く田んぼの間の道」をいうか。

全国地図には、ナカナワテ地名は二ヶ所に中・大字として挙げられている。

#### 【チソウ水】

チソウミズ。

この小字は羽場町四丁目にあり、周辺には、ミズカミ・ヒエダなどの小字がある。

チソウミズとは何か。チソウミズは「地層水」とするには躊躇する。地理学辞典にもある単語で(チソウスイと読むのであろうが)、今でも通用する語であるが、小字発生時に使われていたとは思われない。残念ではあるが、ここでは採らないことにする。

では、チソウミズとは何をいうのであろうか。チソウ(馳走)には、「(用意のため)にかけまわる意から)接待。また、そのためのおいしい食物」を意味する(国語大辞典)。以上から、チソウミズとは「接待に使えるような、おいし水の出ているところ」であろうか。

#### 【中田】

ナカタ。

この小字は、羽場町の二丁目と四丁目の二ヶ所にある。

ナカタとは「それぞれの集落の中心部付近にある場所(田んぼ)」をいうのであろう。

全国地図には、ナカタ地名は35ヶ所に中・大字として記録がある。

#### 【井バタ・井畑】

イバタ。

これらの小字は、羽場町内に六ヶ所ある。

イバタとは、全て、「井水の縁の土地」

をいうものと思われる。

全国地図には、なぜか、イバタ地名もイハタ地名も載っていない。

#### 【スマ畑】

スマハタ。

この小字は羽場町四丁目に二ヶ所ある。

スマハタとは何を意味しているのか。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①スマ=スミ(角)で「曲がり角」をいう。従って、スマハタとは「折れ曲がったようになっている畑」か。小字の形が屈曲しているのは、微地形の形を反映しているのであろう。

②スマ=スミ(隅)で、「端の方」をいうことから、スマハタとは「飯田の段丘の端の方にある畑」を意味するかもしれない。

全国地図には、スミバタ地名もスミハタ地名も載っていない。

#### 【前田ホウゲ】

マエダホウゲ。

羽場町四丁目に松川溪谷の崖縁にある。

ホウゲは飯田市付近の方言で「尾根の傾斜面の平地の端」を意味するという(方言大辞典)。竜丘や下久堅にあるホッキやホキ・ホゲ・ボケ・ホケなどと同源で「崖地」を意味するものと思われる。

マエダホウゲとは「マエダ小字の近くで崖の縁にある土地」をいうのであろう。

#### 【家ノウシロ】

イエノウシロ。

羽場町四丁目の松川溪谷の崖縁にある。

イエノウシロとは、字面の通りで「居住地の裏側にある土地」をいうのであろう。

全国地図には、イエノウシロ地名は記載が無い。

#### 【澤】

サワ。

この小字は羽場町二丁目にあつて、源

長川に接している。

サワは文字通り、「谷川のあるところ」をういのであろう。谷川とは、もちろん源長川を指す。

全国地図には、サワ地名は61ヶ所に中・大字として挙げられており、うち57ヶ所では「沢」の字が宛てられている。

#### 【北沢】

キタザワ。

この小字は羽場町二丁目にあり、サワ小字の北側に接している。

キタザワとは「サワ小字の北側にある土地」をいうのであろう。この小字には沢は流れていない。

全国地図には、キタザワ地名は48ヶ所にあつて、うち47ヶ所に「北沢」の字が宛てられているが、この羽場町のキタザワとは由来が異なるのであろう。

#### 【鶴ヶ渕】

ツルガフチ。

羽場町二丁目に、二ヶ所ある。一つは源長川沿いに、もう一つは円悟沢川沿いにある。

ツルは「細長く曲がったところ」で、フチはフチ（縁）で「川べり」の意（以上は語源辞典）。

以上から、ツルガフチとは「川べりで細長く曲がったところ」を意味するのであろう。

全国地図には、1ヶ所だけツルガフチ地名が、中・大字として挙げられており、「鶴が渕」の字が宛てられている。

#### 【方角】

ホウガク。

この小字は羽場町二丁目にある。

ホウガクとは何か。これもよくわからない地名であるが、二説を挙げておきたい。

①ホウガク←ホウカク＝ホウラク（炮烙）と濁音化した語で、「物をいる浅い土鍋」

をいう（国語大辞典）。従って、ホウガクとは「ホウラクのように浅い土鍋のような凹地」をいうのであろうか。凹地になっていたかどうかは未確認。

②ホウ←ハフの転じた語で「崖地」をいい、ガク←カクと濁音化してカクは動詞カクム（囲）の語幹、「包みこまれたような地形」をいう（以上は語源辞典）。以上から、小字発生当時のホウガクは「浅い崖地に囲まれたようなところ」であったかもしれない。

全国地図には、ホウガク地名は記録されていない。

#### 【町割】

マチワリ。

この小字は羽場町に五ヶ所ある。

マチワリは「町の地割。町を設けるために土地を仕切ること」をいう（広辞苑）。従って、マチワリとは、「地割をしたときに拠点となったところ」であろうか。

全国地図には、なぜかマチワリ地名は記載が無い。

#### 【内田】

ウチダ。

羽場町二丁目にある小字。

ウチダとは何か。はっきりはしないが、ウチダとは「屋敷の敷地内にある田んぼ」をいうのであろうか。

全国地図には、ウチダ地名は50ヶ所に中・大字として挙げられている。

#### 【北田】

キタダ。

この小字は、羽場町二丁目、二ヶ所ある。

キタダとは「北の方にある土地（田んぼ）」であろう。キタとは羽場地区の北部をいうのか、それとも恵光寺などの寺社の北の方をいうのか、はっきりしない。

全国地図には、キタダ地名は29ヶ所が中・大字として記載があり、全てに「北

田」の字が宛てられている。

#### 【ホウケ田】

ホウケダ。

羽場町二丁目にある小字。

ホウケダとは「崩れたことのある土地（田んぼ）」を意味する。円悟沢左岸にあり、川岸が崩れたことがあったのであろう。

全国地図には、ホウケダ地名は記載が無い。

#### 【モノモヲサ】

モノモオウサ。

この小字は、羽場町二丁目の円悟沢川左岸にある。

モノモオサとは何を意味するのか。わかりにくい地名である。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①モ・ノモ・オサで、モは「意味の無い接頭語」、ノモはヌマ（沼）が転じた語で「湿地」を、オサは動詞オサフ（押）の語幹で「壊れた所を修理する」の意。以上から、モノモオサとは「湿地で谷川に接した場所が崩れて修理したことのある土地」をいうのであろうか。

②モノ・モ・オサで、モノ（物）は「神仏など畏怖すべき対象を漠然とさしたもので、モは「あたり」を示す接尾語、オサは水田の一区画をいう。以上から、モノモオサとは「近くに畏怖すべき対象がある水田」であらうか。円悟沢川の対岸には恵光寺がある。

全国地図にはモノモオサ地名は無い。

#### 【弓矢・下弓矢】

ユミヤ・シモユミヤ。

羽場町の北部に、これらの小字が六ヶ所に分布し、ほぼ一所に集まっている。また、羽場仲畑にも中央道の西側にユミヤ小字が二ヶ所ある。

ユミヤとは何か。ユミヤとは「弓矢をとる身。また、その家」（広辞苑）をいう。

そこで二説を挙げておく。

①武士といっても、おそらくは下級武士と思われるが、ユミヤとは「武士の屋敷のあった所」であらうか。近くには木戸小字もあるので、木戸や街道の警備にあたる武士の住まいがあったのではないであらうか。

②ユミヤとは「武器製造に関わった作業所のあった場所」かもしれない。しかしそれにしてもは広すぎるという懸念もある。

シモユミヤは、「ユミヤ小字の下の方にある土地」をいうか。カミユミヤがどうしてないのかは、わからない。

全国地図には、ユミヤ地名は、2ヶ所に中・大字として挙げられており、いずれも「弓矢」の字が宛てられている。

#### 【観音沢】

カンノンザワ。

羽場町二丁目にあり、源長川と円悟沢川の間であり、シモユミヤ小字に接している。

カンノンザワとは「観音様を祀った辺りを流れてくる井水」を意味するものと思われる。

これ以上のことは、はっきりしていない。

全国地図には、カンノンザワ地名は中・大字として2ヶ所に挙げられており、「観音沢」とある。

#### 【石京】

イシギョウ。

この小字は、羽場町の中央道の西側に二ヶ所並んでいる。

イシギョウとは何か。よく分からない地名の一つ。座光寺のイシギョウについては次のように書いた。それ以後、全く進展していない。

イシギョウについて二説を挙げる。

①イシギョウ（石経）で「名号を刻んだ石碑とか石塔が建立されていた場所」（松

崎岩夫)をいうのだろうか。現地には、そうした石造物はないが、かつてあったという可能性はある。

②イシギョウ(石行)で、ギョウは「長くつらなること。並び」(広辞苑)を意味するか。大雨による災害時に水が引いた後に小石が並んでいたことがあったのであろうか。

なお、丸山誌によれば、阿弥陀寺の基を築いた木食弾誓の常念仏の道場があったところを「説教場」と称したが、いつのまにか、それが「石京」になったという。説教場と石京の語が繋がらないので挙げるができなかった。

全国地図には、イシギョウ地名は3ヶ所に中・大字として記載されている。

#### 【チンペイ】

松川大橋に懸かる中央道の東側に二ヶ所ある。

チンペイは固有名詞ともとれるが、固有名詞だけでは小字にはなりにくいと判断して、ここでは採り挙げないことにした。

では、チンペイとは何か。チンペイはチリヘイが撥音便化した語と考えたい。以下は語源辞典に依りながら三説を挙げる。

①ヘイは「平」の字を音読したもので、ヒラ(坂。斜面)あるいはタヒラ(平)をいう。チリは動詞チル(散)の連用形が名詞化した語で「崩壊地形」をいう。以上から、チンペイとは「崩崖に続く傾斜地」をいうのであろう。

②チリはチリ(塵)で、「湿地」をいう。古くはチリアクタとかチリヒヂなど、他の「湿地」をいう語と並べて使われていたからだという。推定の範囲だという。以上から、チンペイとは、「湿地になっている斜面」をいうか。

③チリのチはフチ(縁)の上略形で、リ

は「場所」を示す接尾語。従って、チンペイとは、「崖縁となっている斜面」をいうのかもしれない。

全国地図には、当然のことながら、チンペイ地名は記載されていない。

#### 【福島】

フクシマ。

この小字は羽場地区の南部に五ヶ所ある。

フクシマとは何か。二説を挙げる。

①フクシ・マ(場所をいう接尾語)か。フクシ←フケチと転じたもので、フケ(沮)は「湿地」をいい、マ(間)も「場所」を示す接尾語(以上は語源辞典)。従って、フクシマとは「湿地になっている所」をいう。「場所」接尾語が重なっているのが気になる。

②シマは周辺より少し高い場所をいうか。フク←フケとイ段からウ段へと母音変化したもので、こうしたケースはかなり多いらしい(国語学大辞典)。フケは動詞フク(吹)の連用形が名詞化した語で「鍛冶屋」を意味しているのかもしれない。以上から、フクシマとは「鍛冶屋のあった微高地」か。

①と②は凹地と凸地で逆になっているが、現地では確認してない。

全国地図では、フクシマ地名は57ヶ所に中・大字として記載がある。

#### 【平畑】

ヒラバタ。

羽場町五丁目にある小さな小字である。ヒラバタとは「緩傾斜地にある畑地」をいうのであろうか。

全国地図には、ヒラバタ地名は4ヶ所に中・大字として挙げられており、その全てが「平畑」となっている。

#### 【寺田】

テラダ。

この小字は、羽場町に二ヶ所ある。

テラダとは「寺院所有の田地」(広辞苑)をいう。

全国地図には、テラダ地名は55ヶ所に中・大字として挙げられている。

#### 【彦四郎田】

ヒコシロウダ。

羽場町三丁目で、中央道な懸かっている小字である。

ヒコシロウは固有名詞で、ヒコシロウダとは「彦四郎所有の田んぼ」であろう。

#### 【水ナシ】

ミズナシ。

この小字は、羽場町三丁目にある。

ミズナシとは何か。国語大辞典に依りながら二説を挙げる。

①ミズナシとは飯田付近の方言で「がらがらの岩の沢」をいう。現在は、この小字には沢は無いが、小字発生時にはあったことも考えられるので、挙げておくことにした。

②ミズナシとは「乾田」のことをいう。広島の方言らしいが、ここでも通用しそうだ。

全国地図には、ミズナシ地名は23ヶ所に挙げられており、うち18ヶ所は「水無」の字が宛てられている。

#### 【道下・道上】

ミチシタ・ミチウエ。

ミチシタ小字は、羽場町三丁目に2ヶ所あり、ミチウエ小字は羽場の宮本集会場付近に2ヶ所ある。

ミチシタとは、「道路の下の方にある土地」をいい、ミチウエとは「道路の上の方にある土地」をいう。

全国地図には、ミチシタ地名は21ヶ所、ミチウエ地名は13ヶ所に中・大字として挙げられている。

#### 【溝バタ】

ミゾバタ。

羽場町三丁目にある。

ミゾ（溝）は「地を細長く掘って水を流す所」(広辞苑)をいい、バタはハタ(端)であろう。従って、ミゾバタとは「井水が傍を流れているところ」をいう。

全国地図には、ミゾバタ地名は中・大字として2ヶ所に挙げられている。

#### 【正金作り】

ショウキンヅクリ。

この小字は羽場町三丁目にある。

ショウキン（正金）とは「強制通用力を有する貨幣。金銀貨幣。補助貨幣である紙幣に対していう」(国語大辞典)。

ショウキンヅクリとは何か。二説を挙げる。

①ショウキンヅクリとは「錢貨を鑄造していた場所」であろうか。江戸時代、錢貨の鑄造・発行所を錢座といった。錢座は「民間の鑄造請負を許可し、各地に設置された」(広辞苑)という。その一つが飯田にもあったのかもしれない。

②ショウキンヅクリはショウキン(銷金)ヅクリをいうことも考えられる。銷金とは「文様に金箔を散らすこと」(国語大辞典)である。そんな作業場が飯田にもあったかどうか。

全国地図には、ショウキンヅクリ地名は記載されていない。

#### 【明道】

ミョウドウ。

これも羽場町三丁目にある。

ミョウドウとは何か。国語大辞典に依りながら二説を挙げたい。

①ミョウドウ←ミョウド(妙土)と長音化したもので「靈妙な場所」をいう。日葡辞書にもある。神仏が祀られていた場所であろうか。

②ミョウドウ(冥道)で、「冥界で閻魔王やその下僚のいるところ」か。十王堂などの御堂があったのかもしれない。

全国地図には、ミョウドウ地名は4ヶ



所に中・大字として挙げられている。

#### 【横井下】

ヨコイシタ。

この小字も羽場町三丁目にある。

ヨコイは、ほぼ等高線に沿うように流れている井水をいう。北沢から取り入れて松川へ流している井水か。ヨコイシタとは、「横井の流れる下方の土地」をいう。

全国地図には、ヨコイシタ地名は載っていない。

#### 【諏訪分】

スワブン。

羽場地域に三ヶ所ある小字、うち一ヶ所には羽場公民館がある。

スワブンとは「諏訪神社の社領」をいうか。収穫物は諏訪神社の祭祀や神殿の維持管理に宛てられたのであろう。免租地であった可能性もある。

2. 5万分の1の全国地図には、スワブン地名は載っていない。

#### 【隠居免】

インキョメン。

この小字は羽場公民館の周辺に四ヶ所もある。

隠居免＝隠居分で、「隠居する際、または隠居したものに隠居の財産として、その家の動産・不動産を分割してあてがうもの」（国語大辞典）だという。

インキョメン小字の周辺には「近藤」「近藤畑」などのコンドウ小字群がある。隠居したのは、この近藤家の者か。

全国地図にはインキョメン地名は記載が無い。

#### 【南畑】

ミナミバタ。

この小字は、羽場町三丁目、羽場公民館の近くに二ヶ所ある。

ミナミバタとは「南の方にある畑」をいうのであろう。方角の基準になっているのは、近藤家の屋敷であろうか。

#### 【近藤】

コンドウ。

羽場町三丁目の羽場公民館の北側に三ヶ所ある。

コンドウは固有名詞であろう。姓である。コンドウは「近藤家の屋敷がある（あった）所」をいうのであろう。

丸山誌によれば、文治三年（1187）阿波の人、近藤六郎周家が郊戸の庄の地頭となって、松原宿に館を建て、九年後に愛宕城へ移って坂西と名乗ったという。

コンドウが姓であるにも関わらず、全国地図には、コンドウ地名が、中・大字として11ヶ所に記載されている。

#### 【サツミ】

この小字は羽場の中央道の両側に五ヶ所分布している。

この五ヶ所は小字発生時には繋がっていて、後に「諏訪分」「観音畑」「近藤」小字群が入ってきたのではないかと思われる。

サツミとは何を意味するのだろうか。語源辞典と国語学大辞典に依りながら、二説を挙げたい。

①サツ←サシと変化したもので、サシは「直線的に動く」意から、「傾斜。勾配」をいい、ミは接尾語で漠然として「場所」を示す。以上から、サツミとは「雨水などが直線的に移動する傾斜地」をいうか。

②サツ←サトと母音変化しているか。この変化は特に中世前後に多かったのではないかという。サトは山に対して「山麓」を意味する。従って、サツミとは「（権現山の）山麓になっている土地」か。

全国地図には、サツミ地名は載っていない。

#### 【上ノ畑】

ウエノハタ。

この小字は、羽場の中央道の沿線に四ヶ所ある。

ウエノハタとは、字面の通りで「高い方にある畑」であろう。基準になっているのは、コンドウ小字群と関わる有力者の近藤氏の屋敷か、カンノンバタ小字と関わる観音様を安置している場所と思われる。

全国地図には、ウエノハタ地名は4ヶ所に、中・大字として挙げられている。

#### 【寺前】

テラマエ。

この小字は、羽場の中央道北西側にある。周辺部にカンノンバタ小字があり、同じ御堂に関わる小字であろう。この御堂は、『伊那郡神社佛閣記』にある「羽場観音堂」と思われる。

2. 5万分の1の全国地図には、テラマエ地名には、中・大字として52ヶ所に記載されている。

#### 【観音畑】

カンノンバタ。

この小字も、羽場の中央道付近に三ヶ所ある。

カンノンバタとは羽場の観音堂に関わる小字である。カンノンバタとは何か。由来を三説挙げる。

- ①「かつて観音堂があったところにある畑」か。
- ②「収穫物を観音堂の仏事を行ったり、御堂の修理等に宛てたりした畑」かもしれない。むろん免租の地であったのであろう。
- ③「観音堂境内の端の土地」も考えられる。ハタはハタ（端）とすれば。

全国地図には、なぜか、カンノンバタ地名は記載が無い。

#### 【隠居畑】

インキョバタ。

羽場中央道周辺のコンドウ小字群の中にある。

インキョバタとは、「隠居した人の所有

地」であるが、隠居免と同じ意味があるのかもしれない。有力者近藤氏の所有地が多すぎるので、小字名を少しずつ変えていたのかもしれない。

全国地図には、インキョバタ地名は載っていない。

#### 【クシロ】

羽場町三丁目にある小字で、コンドウ小字群の中にある。

クシロとは何か。分かりにくい小字である。二説を挙げておきたい。

①クシロ（鉋）＝カナガキ（金掻）で「農具の一つ。熊手の形の地ならしの類で、櫛の台に鉄の歯を植えたもの」（国語大辞典）であるという。以上から、クシロとは「クシロなど農具を作っていた職人の作業場のあった所」を意味するか。

②クシは「屋根の棟」をいう方言グシに通じる。東日本に広がる方言で、信濃もその中にある。ロは漠然と「場所」を示す。（以上は語源辞典）したがって、クシロとは「屋敷があった所」をいうか。屋根の棟で屋敷を指しているのであろう。

全国地図には、クシロ地名は5ヶ所に中・大字として挙げられている。

#### 【近藤畑】

コンドウバタ。

羽場のコンドウ小字群の中に三ヶ所ある。

コンドウバタとは、字面の通りで「近藤氏の所有する畑」をいうのであろう。

むろんコンドウバタ地名は全国地図には無い。

#### 【山口・山口前】

ヤマグチ・ヤマグチマエ。

これらの小字は、羽場仲畑の元山白山神社の前の方（南東方向）にあり、ヤマグチ小字が6ヶ所、ヤマグチマエ小字が2ヶ所にある。

ヤマグチとは「山の入口」であり「鷹

狩りの場に入るところ」ことをいう。ここでは、山作業でも鷹狩りでも山に入る許しを得るように白山権現や山神を祀る神事が行われたのであろう。

ヤマグチマエはヤマグチ小字の手前にある土地で、神事に関わる事前の準備が行われたところであろうか。詳しいことはわからない。

ヤマグチ地名は全国地図に、中・大字として233ヶ所にも挙げられている。

#### 【押ノ木】

オシノキ。

この小字は、羽場仲畑に二ヶ所ある。

オシ(押)は「押し出された地形」で、ノキはヌキ(抜)の転で「崩壊地形」をいう(以上は語源辞典)。従って、オシノキとは「押し出された崩壊地」をいうのであろう。

別に、オシノクという自動詞があったのではないかと思えるがどうであろうか。辞書類には記載がないので、自信はないが、オシノク(押退)である。ここから、オシノキは押退くの連用形が名詞化した語とみることができる。すなわち、「押されて下がってきた土地」となる。

全国地図には、オシノキ地名は記載が無い。

#### 【北垣外】

キタガイト。

この小字は、砂払町二丁目名に二ヶ所ある。

キタガイトとは何か。二説を挙げる。

①キタガイトとは、「羽場の北の方にある屋敷跡」か。

②キタはキダハシ(階)のこと。従って、キタガイトとは「棚状になった土地にある屋敷跡」かもしれない。

全国地図には、キタガイト地名は10ヶ所に中・大字として記録されている。

#### 【湯渡】

ユド。

この小字は羽場の北部の三ヶ所に分布している。

ユドとは何か。二説を挙げたい。

①ユ(湯)は「用水路」で、ド(渡)は「沢の合流点」であるという(以上は語源辞典)。すなわち、ユドとは「井水の合流する所」をいうのであろうか。円悟沢川が横井と合流しているようにみえるが、まだ確認はしていない。

②ド←トと濁音化した語で、トは「場所」を示す接尾語。可能性は小さいと思うが、温泉がでたことがあれば、ユドとは「お湯の出たところ」を意味する。

全国地図には、ユド地名は4ヶ所に、中・大字として挙げられており、うち3ヶ所には「湯戸」の字が宛てられている。

#### 【佐屋敷】

スケヤシキ。

砂払町二丁目にある小さな小字である。

スケヤシキとは何か。二説を挙げる。

①字面通りであれば、スケヤシキとは「律令制の次官の屋敷のあった所」ということになるが、果たして次官がこの地にいたことがあったのかどうか、疑問である。

②スケ=スケバシラ(檣柱)で「建物が倒れるのを防ぐために、支えに立てる柱」(国語大辞典)だという。とすれば、スケヤシキとは「支えに柱をたててある屋敷」ということになる。

全国地図にはスケヤシキ地名は記載が無い。

#### 【清水ダレ】

シミズダレ。

この小字は砂払町二丁目、二ヶ所ある。

シミズダレとは、「自然湧水のある傾斜地」を意味するものと思われる。

シミズダレ地名も、全国地図には載っていない。

### 【高不二】

タカフジ。

この小字は羽場権現の南東向き斜面の麓にある。

タカフジとは何か。二説を挙げる。

①タカフジはタカフ（竹生）・ジ（地）か（国語大辞典）。従って、タカフジとは「竹やぶであった所」を意味するか。

②タカは「限界」の意があり「台地の端」などを示し、フジはフシ（節）で「微高地」をいう（以上は語源辞典）。従って、タカフジとは「羽場権現の台地の端で、少し南東側からみて高くなっている所」であろうか。

タカフジ地名は、全国地図には無い。

### 【北畑】

キタバタ。

この小字は羽場仲畑の北部にある。

キタバタとは①「羽場中心部から見て北の方にある畑」か、②「棚状の畑地」をいうのであろう。

全国地図には、キタバタ地名は、中・大字として、11ヶ所が挙げられている。

### 【森下】

モリシタ。

元山白山神社のある羽場権現の丘陵の南東側の下方に、この小字は四ヶ所分布している。

モチ（森・杜）は「神社などのある神域で、神霊の寄りつく樹木が高く群がり立つ所」（国語大辞典）をいう。

従って、モリシタとは「神域に樹木が群がり立つ森の下の方の土地」をいう。

全国地図には、モリシタ地名は35ヶ所に中・大字として挙げられており、うち32ヶ所には「森下」の字が宛てられている。

### 【田クシロ】

タクシロ。

中央道を挟んで、クシロ小字の反対側

にある。

タクシロとは何か。二説を挙げる。

①クシロは「農機具製作所」としてのもので、それに関わる小字と考えて、タクシロとは「水田に使う農具を作る職人の住んでいた所」であろうか。

②タクは動詞タクレルの語幹で「滑り落ちる」の意、シロは赤石山地で使われているという語で「緩やかな傾斜地」を意味する（以上は語源辞典）。従って、タクシロとは「すべり落ちてきたことがある緩い傾斜地」をいうのかもしれない。

全国地図には、タクシロ地名は載っていない。

### 【家ノ前・家ノ裏・家ノ南】

イエノマエ・イエノウラ・イエノミナミ。

羽場仲畑に、これらの小字が五ヶ所にはぼ集まっている。

これらの中心になっているのは近藤家の関係者の屋敷であろう。すぐ北東側には、近藤小字群がある。

### 【山神】

ヤマノカミ。

羽場権現の南東向き傾斜地の麓付近にある。

山神は「山に宿り、山林ならびにそこに棲息する生物を領有すると信じられた神霊の総称。…（中略）…一般では山の神の名で小祠・磐座・大木または特徴のある樹木を依代としてまつているほか、幣帛または常磐木をもって山中の随所でまつる」（民俗大辞典）という。羽場の山神がどのように祀られているのかはわからない。

全国地図では、ヤマノカミ地名は、中・大字として70ヶ所に記載されている。

### 【権現堂】

ゴンゲンドウ。

羽場権現にある小字で、元山白山神社

周辺の八ヶ所に分布している。

ゴンゲンドウとは「権現様を安置する御堂」か。権現様とは白山権現である。神仏分離政策により権現号の使用を禁止されが、かろうじて小字地名としてゴンゲン名が残されているのであろう。

全国地図には、ゴンゲンドウ地名は中・大字として21ヶ所に記載され、全てに「権現堂」の字が宛てられている。

#### 【鷲ノ巣】

ワシノス。

この小字は、羽場権現の丘陵の南東向き傾斜地にあり、宮本集会所がある。

ワシノスとは何か。二説を挙げる。

①タカ科の鳥類をワシとしているのかもしれない。ワシノスとは、文字通り「鷹の巣があった場所」か。

②ワシは動詞ワシル（走）の語幹で「急傾斜地」をいい、ノは助詞、スはス（州）で「押し流されて堆積した土砂」をいう（以上は語源辞典）。従って、ワシノスとは「傾斜地で押し出された土砂が堆積したところ」をいうか。

2. 5万分の1の全国地図には、ワシノス地名は、17ヶ所に中・大字として挙げられている。

#### 【ダンゴタ】

羽場仲畑にある小字。

ダンゴタとは何を意味するのであろうか。三説を挙げる。

①タンゴ←タンコと濁音化した語で、タンコとは律令制で雑戸の一つで銅鉄器の製造に関わったという（国語大辞典）。以上から、タンゴダとは「銅鉄器を作る職人の所有地で、免租地になっていた田んぼ」と解釈できるがどうであろうか。

②語源辞典によれば、ダンゴタはダン（段）・ゴタ（湿地）か。すなわち、ダンゴタとは「段差のある湿地」をいうのかもしれない。

③タンゴとはタンゴ（担桶）で「担い桶」をいう（国語大辞典）。従って、タンゴダとは「担い桶など桶類を製造していたところ」かもしれない。

全国地図には、ダンゴタ地名は1ヶ所に、中・大字として挙げられている。

#### 【窪田】

クボタ。

松川溪谷の北側の段丘縁にある。

クボタとは「凹んだ場所（田んぼ）」をいうのであろう。

この地方にも多い地名であるが、全国地図にも、81ヶ所が中・大字として記録されている。

#### 【中畑】

ナカハタ。

この小字は羽場仲町付近に三ヶ所ある。

これらの小字は、所在地により由来も異なると思われる。

ナカハタとは何をいうのか。二説を挙げる。

①ナカハタとは、文字通りで「中心部にある畑」であろうか。羽場の中心部を意味するのであろう。

②ナカ←ナガ←ナギ（薙）と転訛した語で「崩崖」をいい、ハタはハタ（端）で「縁」をいう（以上は語源辞典）。従って、ナカハタとは「崩崖のある段丘の縁」をいうか。

#### 【寺田】

テラダ。

この小字は、元山白山神社の前方にある。

テラダとは何をいうか。二説を挙げる。

①テラダはテラ（寺）・ダ（処）で「寺院のあった所」をいうのであろうか。

②テラダは広辞苑にあるように「寺院所有の田地」であったかもしれない。

寺というのは神宮寺だったかもしれない。

### 【池上】

イケガミ。

羽場の元山白山神社の前方に、この小字は六ヶ所ある。

イケガミとは何か。わかりきったような地名であるが、よく分からない。二説を挙げておきたい。

イケガミとは文字通りに解釈すれば、「堤の上の方の土地」ということになる。しかし、その堤がどこにあったのかははっきりしない。

①かつて、南東の方に堤があったのか、あるいは②イケとは流水のことで、縦横に流れている井水のことか、あるいは松川のことであるかもしれない。

全国地図にはイケガミ地名は中・大字として12ヶ所に記載がある。

### 【権現堂池上】

ゴンゲンドウイケガミ。

羽場権現の丘陵の南東向き傾斜地にある、比較的広い小字であり、元山白山神社も鎮座している。

複合小字というべきか、ゴンゲンドウイケガミとは「権現堂があった所で堤の上の方にある土地」を意味する。

### 【森山】

モリヤマ。

元山白山神社の鎮座する羽場権現丘陵の南東向き傾斜地の麓にある。

モリ（森）は「神社などの神域」でヤマ（山）は「寺の境内」をいう（以上は国語大辞典）。以上からモリヤマとは「神仏習合時代の神聖な土地」をいうか。よき時代の名残というのはいき過ぎであろうか。

全国地図には、モリヤマ地名は46ヶ所に中・大字として挙げられている。

### 【百性持・百性地】

ヒャクショウジ。モチ（持）→ジ（持）→ジ（地）と変化したか、あるいは逆の

変化であったかもしれない。

ヒャクショウ（百姓）は、中世には位階をもつ侍と区別され、課役を免除された職能民（職人）や不自由民である下人と異なり、年貢・公事負担の義務を負う人々であり、近世には武士・町人と区別され、村の成員として諸役を負担し、その所持する田畠・屋敷が検地の対象とされた人々であった（民俗大辞典）。

従って、ヒャクショウジとは、「寺社や武士・町人ではない百姓の所有する土地」を意味するものと思われる。

全国地図には、ヒャクショウジ地名もヒャクショウモチ地名も記録されていない。

### 【清五畑】

セイゴハタ。

羽場権現の南東向き傾斜地の上の台地上にある。

セイゴハタとは何か。セイゴはセイ・コ（処）でセイはセ（背）の長音化した語であるという（語源辞典）。以上から、セイゴハタとは「側稜の背中のようになっている場所にある畑地」をいうのであろう。

セイゴを固有名詞とする見方もあるが、やや遠い感じがするので、ここでは挙げていない。

全国地図にはセイゴハタ地名もシゴバタ地名も記載はされていない。

### 【湯戸ノ坂・湯戸坂】

ユドノサカ。

この小字は、羽場のユド小字のほぼ下流側に四ヶ所ある。

ユドノサカとは「ユドへ登る坂道」をいう。

ユドノサカ小字の存在は、ユド＝出湯説の傍証にはならないであろうか。

ユドノサカ地名は全国地図には無い。

### 【駒形】

コマガタ。

この小字は、羽場権現の丘陵の北東部にある。

コマガタとは何か。二説を挙げる。

①コマガタは「将棋の駒の形をしたもの」をいう（国語大辞典）。従って、このコマガタとは「将棋の駒のような形をした丘」を意味する。側稜の先端部を将棋の駒の形に見立てたもの。

②コマは「輪」で「輪状に囲まれた土地」のこと、カタは「場所」をいう（語源辞典）。すなわち、コマガタとは「山麓線によって、丸く囲まれたところ」をいうか。このコマは近世には存在したというコマ（独楽）の形に見立てたものと考えた方がいいように思えるがどうであろうか。

全国地図には、コマガタ地名は18ヶ所に挙げられている。

#### 【森原】

モリハラ。

羽場権現の台地上にある。

モリは神聖な場所で高い樹木が群がり立つところであり、ハラは神聖な地でもある山腹をいうのであろう。

モリハラは「高い樹木が群がり立つ、山腹の神聖な地」であらう。

全国地図には、モリハラ地名は、2ヶ所に中・大字として挙げられており、いずれも「森原」の字が宛てられている。

#### 【森上】

モリウエ。

この小字は羽場権現の台地上にあり、元山白山神社のすぐ北側にある。

モリウエは、「高い樹木が群がり立つ神聖な地の上の方にある土地」か。

全国地図には、モリウエ地名は中・大字として3ヶ所あり、いずれも「森上」の文字になっている。

#### 【ツド井・ツド井原】

ツドイ・ツドイハラ。

これらの小字は飯田に西中学校の南側の砂払町二丁目付近にあり、ツドイ小字は六ヶ所、ツドイハラ小字は二ヶ所に分布している。

ツドイとは何を意味するのか。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①ツはツ（津）で「水のある所」をいい、ドイはドイ（土井）で「土を盛り上げた土手」のこと。以上から、ツドイとは「堤のあった所」をいうのであろうか。水を溜めているところは、現在は砂払の配水池しか見当たらないが、かつてはあちこちに溜池があったと思われる。

②「土を盛り上げた所」は土塁で「有力者の屋敷があった所」かもしれない。すなわち、ツドイとは、「有力者の屋敷があった湿地」かもしれない。

③あるいは、ドイ←ドエ（崩）と転じたもので、ツドイとは「土石流が広がって流れたことがある湿地」であらうか。円悟沢川と阿弥陀沢川の間扇状地なので、可能性はある。

ツドイハラは「ツドイのある神聖な緩傾斜地」をいうか。

全国地図にはツドイ地名は3ヶ所に中・大字として挙げられている。うち2ヶ所には「津土井」の字が宛てられている。

#### 【千躰佛】

センタイブツ。

丸山町二丁目の阿弥陀寺境内にある。

千躰佛観音堂は寛文十二年（1672）に飯田藩主脇坂安政公が建立したもので、本尊は聖観音、その左右前後には900余体の小聖観音像が安置されているという。

センタイブツとは「千躰佛を安置した観音堂のあるところ」をいう。

全国地図には、センタイブツ地名は載っていない。

### 【鐘鑄原】

カネイバラ。

正永町一丁目の飯田西中学校や県営住宅泉ヶ丘団地になっている、大きな小字である。南東向きの緩傾斜地になっている。

カネイ（鐘鑄）とは「鐘を鑄造すること」をいう（国語大辞典）。従って、カネイバラとは「梵鐘を鑄造した山腹の緩傾斜地」であろう。鑄物師はここまで出向いて飯田の寺院の梵鐘を鑄造したものと思われる。作業場を構えて鑄造をした居職に対して、梵鐘など運搬しにくいものなどは現地で鑄る出職の鑄物師によって作られたものであろう（日本職人史の研究）。どこの梵鐘を鑄たところであるかは分からない。近い所には正永寺や阿弥陀寺があるが。

全国地図には、カネイバラ地名は無いが、カネイハラ地名は1ヶ所に中・大字として挙げられており、「金居原」の字が宛てられている。

### 【下屋敷】

シモヤシキ。

カネイバラ・ショウエイジハラ・ツドイハラ小字の近くに、シモヤシキ小字は二ヶ所ある。

下屋敷は「控えの屋敷。別邸。江戸時代には、大名や豪商の主人常住の上屋敷に対していった」（国語大辞典）という。

以上から、ここでいうシモヤシキとは「飯田藩の藩主か上級武士の別邸があったところ」と考えられる。

全国地図には、シモヤシキ地名は27ヶ所に、中・大字として挙げられており、そのすべてに「下屋敷」の字が宛てられている。

### 【正永寺原・正永寺山】

ショウエイジハラ・ショウエイジヤマ。

羽場・丸山の北部に、ショウエイジハ

ラ小字は十ヶ所ほど、ショウエイジヤマは五ヶ所ほど分布する。

ショウエイジハラは「正永寺があった（あるいは寺領であった）中腹の緩傾斜地」をいい、ショウエイジヤマとは「正永寺の寺領であった山地」をいうのであろうか。

正永寺は『伊那郡神社佛閣記』によれば、飯田藩主が入道して正永と名を改めて、円悟沢に閑居したが、没後、そこに正永寺を建立した。正長元年（1428）のことである。その後、文禄年中（1592～1596）に江戸町に移したとある。

### 【ヨキトギ】

砂払町のツドイ小字の近くに三ヶ所ある。

ヨキは「オノ（斧）の小形のもの」（国語大辞典）。トギは動詞トグ（研）の連用形が名詞化した語。従って、ヨキトギとは「斧や刀剣類を研ぐ職人の家のあった所」であろうか。研師とか研屋をいっていたようだ。

全国地図には、ヨキトギ地名は1ヶ所にだけ中・大字として記載されており、「斧磨」の字が宛てられている。

### 【ツボ田】

ツボタ。

砂払町のツドイ小字に挟まれた小さな小字である。

ツボタとは「つぼんだような地形になっている田んぼ」をいうのであろう。

全国地図にはツボタ地名は中・大字として4ヶ所に挙げられている。その全てが「坪田」となっている。

### 【井口田】

イグチダ。

この小字は県道幸助飯田線と円悟沢川が交わる場所の南東方向にあり、円悟沢川右岸になる。

イグチは「中世の灌漑制で用水路から



田地へ引く用水の取入口」をいう（国語大辞典）。

従って、イグチダとは「円悟沢川からの用水取入口のある田んぼ」を意味するのであろう。

全国地図には、イグチダ地名もイクチダ地名も載っていない。

#### 【木戸脇】

キドワキ。

正永町二丁目の道路沿いにある小さな小字である。

キドは街道などに設けられた警備門であろう。従って、キドワキとは「街道に設けられた警備門の傍らの土地」をいう。

全国地図にはキドワキ地名は中・大字として4ヶ所挙げられており、いずれも「木戸脇」の文字になっている。

#### 【アケミ】

アゲミ。

羽場の県道幸助飯田線の北側に二ヶ所ある。

アゲミとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①アゲは「道の山手側」をいい、ミは漠然とした「場所」をいう。従って、アゲミとは「道路の山手側の場所」をいうか。

②アゲには「川の縁」の意があり、ミはミ（廻）で「曲がった地形」をいう。すなわち、アゲミとは「川の縁で川に沿って曲がっている所」か。

全国地図には、アゲミ地名が1ヶ所、中・大字として挙げられており、「上げ見」の字が宛てられている。

#### 【クルミノ木】

クルミノキ。

この小字は、県道幸助飯田線の北側にあり、円悟沢川に合流する流水に巻かれている。

クルミノキはクルミ・ノ（助詞）・キ（サキの略）。クルミはクル（転）・ミ（水）

で「川などの曲流点」（語源辞典）をいい、サキはサキ（崎）で、「台地の先端部」をいうか。

以上から、クルミノキとは「台地の先端部で、流水が廻っている場所」を意味するものと思われる。

しかし、全国地図には、クルミノキ地名は記載が無い。

#### 【竹藪】

タケヤブ。

この小字は正永町二丁目にある。

タケヤブは「竹が繁茂している所」をいうのであろうか、小字で残っているということは、何らかの意味があると思われる。

人手が入らない竹藪には、人も入れないようになる。そこに藪神が鎮座すると思われるようになることが多い。伊那谷南部に多いヤブ小字群には藪神の関与があるように思えてならない。

全国地図には、タケヤブ地名が2ヶ所に中・大字として記載がある。

#### 【天神山】

テンジンヤマ。

正永町二丁目にあり、クボ小字とクボタ小字に挟まれている。

テンジン（天神）は、菅原道真の神号であろう。ヤマ（山）は「高く突起した所」ではなく、「平地林」をいうか（語源辞典）。従って、テンジンヤマとは「天神様を祀っていたことのある林」をいうのであろう。

全国地図には、テンジンヤマ地名は中・大字として41ヶ所にも挙げられており、多い。うち「天神山」の字が宛てられているのは40ヶ所に及ぶ。

#### 【藤ノ木道南】

フジノキミチミナミ。

この小字はショウジハラ小字に囲まれており、円悟沢川沿岸で左岸にある。

フジ＝フチ（縁）で「円悟沢川の辺」をいい、ノキはノキ（抜）で「崩壊地」をいう。以上から、フジノキミチミナミとは「（円悟沢の）沿岸で、崩壊した場所があり、道路の南側になっているところ」であろうか。

#### 【窪】

クボ。

正永町二丁目にあり、テンジンヤマ小字の北隣に接している。

クボとは「窪地」をいう。ちょっとした窪地で深くはない。

全国地図には、クボ地名は265ヶ所にも、中・大字として挙げられている。

#### 【天良森】

テラモリ。

この小字は、大休の熊ヶ洞沢川に跨っており、小字内には天良神社もある。

テラモリとは、「天良神社のある神域で神霊のよりつく樹木が高く群がり立っている所」をいう。

どの程度の森であるのか、まだ確認はしていない。

全国地図には、テラモリ地名が1ヶ所、中・大字として挙げられているが、宛てられている字は「照盛」。

#### 【平沢】

ヒラサワ。

大休の円悟沢川右岸にある広大な小字で、多摩川精機とか殿島神社がある。

ヒラサワとは「流水のある緩傾斜地」をいうのであろう。

全国地図にも、ヒラサワ地名は、65ヶ所と多く挙げられている。

#### 【西ノ原】

ニシノハラ。

大休の西部にある大きな小字である。

ハラ（原）は、緩傾斜地で、ノ（野）以上に水利の便が悪いところをいう（民俗大辞典）。現在は、井水もあり、田んぼ

もあり、住宅・果樹園・畑地にもなっているが、広葉樹林地でもある。

ニシノハラとは、「西部にあり、水利の悪い緩傾斜地」を意味していたのであろう。

全国地図には、ニシノハラ地名は、中・大字として22ヶ所に記載されている。

#### 【風越・風越山】

カザコシ・カザコシヤマ。

これらの小字は、大平街道を跨いで南北に広がっており、権現山の中腹に当たる部分にある。

カザコシとは「南風が当たりやすい山の腰にあたる場所」をいう。山の中腹を人体の腰に見立てたのであろう。

カザコシヤマとは「南風の当たりやすい権現山の腰の部分にある森林地帯」を意味するか。

全国地図には、カザコシ地名は6ヶ所に中・大字として挙げられており、その全てに「風越」の字が宛てられている。

#### 【殿島】

トノシマ・トノシマバラ。

この小字は、松川溪谷の段丘端にある。

トノシマとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①トノはタナ（棚）の転訛した語で、「棚所の地。段丘」をいう。シマは段丘端を松川など下の方から見て、島に見立てたのであろうか。以上から、トノシマとは「海中の島のように見える段丘端」をいうか。

②シマ←シバの転じた語で、「崩崖」をいう。従って、トノシマとは「崩崖のる段丘」を意味するか。

トノシマ地名は、全国地図に3ヶ所が中・大字として記載されていて、宛てられている文字は全て「殿島」となっている。

#### 【殿島原】

トノジマハラ。

松川溪谷付近に四ヶ所にある。段丘端であったり、段丘崖や氾濫原にあったり、四ヶ所の地形は一定していない。

トノジマハラとは何を意味しているのか。語源辞典に依りながら三説を挙げておきたい。

①トノ←タナ（棚）と変化した語で、ジマはシマ（島）、ハラはハラ（腹）で「山腹」をいう。以上から、トノジマハラとは「下から見ると島のように見える山腹」か。

②シマ←シバ（崩崖）とすると、トノシマバラとは「島のように見える段丘崖のある山の中腹部」か。段丘崖にあるトノシマバラの説明にはなる。

③ハラは「林」と解する。トノジマハラとは「段丘の下段にある氾濫原で島のようにみえる林地」であろうか。氾濫原にあるトノジマバラについてである。

#### 【黒岩】

クロイワ。

大休のヒラサワ小字の南隣にあり、松川溪谷に隣接する緩傾斜地にある。現在は果樹園になっている。

クロは「畑の隅」で伊那谷の方言でもある。イワは「石」のこと。

以上から、クロイワとは「畑の隅に石を積み上げてあるところ」をいうのであろう。耕作の邪魔になる石を拾っては畑の隅に積む作業は今でも行われている。

全国地図には、クロイワ地名は中・大字として66ヶ所にも挙げられており、うち64ヶ所には「黒岩」の字が宛てられている。

#### 【切通】

キリドオシ。

この小字は松川の堤外地を含むその氾濫原に一ヶ所、最下段の段丘崖に一ヶ所分布している。

キリドオシとは「山や丘などを切り開いて道路を通すこと。また、その道路」をいう（国語大辞典）。松川の堤外地もキリドオシ小字内にあるので、戸惑ったが、道路に注目すれば、その通りの地形と道になっている。

2. 5万分の1全国地図には、キリドオシ地名は11ヶ所が中・大字として記録されており、内10ヶ所には「切通(し)」の字があてられている。

#### 【川原・上川原】

カワラ小字は松川の氾濫原に八ヶ所ほど、カミカワラ小字は三ヶ所にある。

カワラとは、「松川の氾濫原で堤防の内外にわたる土地」となるか。

カミカワラは「カワラ小字の上流側にある土地」を意味するのであろうが、必ずしもそうした関係にはなっていない。小字発生時には、カワラとカミカワラは明瞭に区別があったのであろうが、時間の経過とともに、それぞれの小字の範囲が不明瞭になっていったものと思われる。

全国地図には、カワラ地名は126ヶ所に、中・大字として挙げられている。

#### 【井桁】

イゲタ。

松川氾濫原の最下段の段丘崖に二ヶ所ある。

イゲタとは何を意味しているのか。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①イゲタ←キ（井）・キダ（刻）と転訛した語で、「流水のある土地の段丘とか崖」をいうのであろうか。キは井水ばかりではなく、河川をいうこともある。

②イゲ・タ（処）で、イゲは「茨」をいう。日葡辞書にも出ているという。従って、イゲタとは「茨のあるところ」をいうか。段丘崖には、人があまり立ち入らない。そうした場所には茨が自生している。そのことが地名化したと考えるが、

どうであろうか。

全国地図には、イゲタ地名は2ヶ所に中・大字として挙げられており、いずれも「井桁」の文字が宛てられている。

#### 【大ナギ】

オオナギ。

この小字は、松川の堤防付近と松川溪谷最下段の段丘崖に三ヶ所ある。

ナギ(薙)とは「山で、薙ぎ落としたように崩れた地点」をいう(広辞苑)。従って、オオナギとは「段丘崖や川端で大きく崩れた場所がある土地」をいうのであろう。

全国地図には、オオナギ地名は3ヶ所に中・大字として挙げられている。

#### 【松川端】

マツカワバタ。

この小字は、松川氾濫原にあり、中央道を挟んで二ヶ所にある。

マツカワバタとは、字面の通りで「松川の川べりの土地」をいう。

#### 【赤坂平】

アカサカヒラか、あるいはアカサカダイラか。

この小字は中央道の北西側の松川溪谷最下段の段丘崖に二ヶ所ある。

アカサカヒラとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①アカは動詞アカツ(散)の語幹で「ばらばらにする」ことから「崩崖」をいい、サカもヒラも「傾斜地」をいう。以上から、アカサカヒラとは「崩崖のある急傾斜地」をいう。

②アカは「赤土のあるところ」で、ダイラは新潟の方言で「山の中腹から麓あたり」をいう。現在は新潟の方言であっても、かつては伊那谷でも使われていた可能性はある。従って、アカサカダイラとは「赤土が見えていた、段丘崖の麓に近い傾斜地」をいうのかもしれない。

全国地図には、アカサカダイラ地名は載っていない。

#### 【ほうげ】

ハウゲ。

この小字は、松川氾濫原と最下段の段丘崖に四ヶ所ある。

ハウゲ←ハウケ←ハケと転訛した語で、「山の斜面の崩れた所。また、急傾斜の地」をいう(語源辞典)。以上から、ハウゲとは「崩れた所のある急傾斜地」をいうのであろう。

ハウゲ地名は、全国地図には1ヶ所に中・大字として記録されているだけである。ハウゲ地名は、伊那谷特有の小字である可能性がある。

#### 【ほうげ森】

ハウゲモリ。

この小字もハウゲ小字に接しており、急傾斜地にあり、マエダホオゲ小字にも近い。

ホオゲモリとは、「森になっている急傾斜地」をいうのであるが、あるいは、神聖な土地というニュアンスも含まれているのかもしれない。しかし、その証拠はない。

#### 【井ボ水】

イボミズ。

この小字は、松川氾濫原に四ヶ所ある。

イボミズとは何をいうのか。イボは動詞イボル(イボウ)の語幹で「(水などが)噴出する所」をいう(語源辞典)。熊本県の方言であることが気になるが、この地域でも膿が吹き出ることをイボルといていた。泉が吹き出るように湧いているのをイボミズと叫ぶのではないだろうか。

以上から、イボミズとは「泉が湧き出ている所」を意味するものと思われる。場所は氾濫原で段丘の麓にあるので、自然の湧水があることは頷ける。

全国地図には、イボミズ地名は中・大字として1ヶ所が挙げられている。

#### 【川向】

カワムカイ。

この小字は中央道の西側で、松川の河川敷内にある。

ムカイには「面と向かうこと」(広辞苑)の意もある。従って、カワムカイとは「川に面と向かっている場所」をいうのであろう。

全国地図には、カワムカイ地名は多く、中・大字として61ヶ所に挙げられている。

#### 【木積場】

キヅミバ。

松川沿いに二ヶ所ある。一つは国道256号線の松川橋付近に、もう一つはJR飯田線の松川鉄橋付近にある。

クヅミバとは、字面の通りで「材木を積んでおく所」であろう。松川の上流部から管流しした材木を、ここで拾い上げて、筏に組んで川を流すところであったと思われる。

全国地図にはキヅミバ地名は載っていない。

#### 【平茶畑】

ヒラチャバタ。

松川溪谷の最下段段丘崖の麓に近いところに三ヶ所ある。

ヒラは長野・愛知県北設楽郡の方言でもあるというが、「山の斜面」をいう(方言大辞典)。従って、ヒラチャバタとは「山の斜面を切り開いて茶畑にした所」であろう。南向きの傾斜地で茶の栽培に適していたのであろう。

#### 【中瀬】

ナカゼ。

この小字は、松川沿岸にある。

ナカゼとは、山梨・静岡県磐田郡の方言であるというが、「川の中にある州」を

いう(国語大辞典)。まだ松川に堤防がないころ、この付近は松川の中洲になっていたのであろうか。

全国地図には、ナカゼ地名は14ヶ所が中・大字として挙げられており、その全てに「中瀬」の文字が宛てられている。

#### 【川端】

カワバタ。

この小字は、松川左岸の二つのマツカワバタ小字に挟まれている。

カワバタとは、字面の通りで「川のほとり」をいう(広辞苑)。むろん松川のほとりをいう。

全国地図には、カワバタ地名は69ヶ所に中・大字として挙げられている。

#### 【浅間】

センゲン。

JR 飯田駅の東側にある比較的大きな小字である。

センゲン(浅間)とは「浅間神社。また、浅間神社の祭神」をいう(国語大辞典)。祭神は木花開耶媛命であるが、この小字名と直接かかわることはないであろう。とすれば、浅間信仰に関わる御堂などがあつたのであろう。

浅間信仰とは富士山に対する信仰のうち浅間神社を中心とする信仰で、中部地方・関東地方を中心に広く分布。江戸時代中期に富士山で入定を執行した身禄行者の教えは男女の和合をはじめとして女性の社会的立場をある程度認める信仰体系を形成したことにより、富士講には女性信者も多かったという(民俗大辞典)。

また、センゲンはセンゲン(泉源)で「清水の湧き出ていたところ」とすることもできるが、ここでは採り挙げない。

全国地図には、センゲン地名が、中・大字として8ヶ所に記載がある。

#### 【西】

ニシ。

この小字は飯田文化会館の道路を隔てた北東側にある。

ニシとは何か。二説を挙げる。

①ニシは動詞ニジル（躓）の清音化した語で、「崩壊地形」をいう（語源辞典）。従って、このニシも「崩れ地のあったところ」をいうのであろう。傾斜地の麓部分にあり、傾斜地が崩れたことがあったのであろうか。

②ニシはニシ（西）で、文字通り「お宮の西方の土地」をうのであろうか。お宮というのは、現在は小字にしか残っていないが、神明社を指すものと思われる。

全国地図には、ニシ地名は162ヶ所が、中・大字として挙げられている。

#### 【松洞・松洞口】

マツボラ・マツボラグチ。

マツボラ小字は飯田市斎場のあるところ、この小字の上流側にマツボラ小字がある。

マツボラとは「アカマツが自生している小さな谷」をいうのであろう。

マツボラグチとは「マツボラに登る入口の土地」をいうのであろう。

#### 【中島】

ナカジマ。

この小字は丸山町三丁目にあり、現在は大部分が水田になっている。

ナカジマとは何か。二説を挙げる。

①この土地は三方を山の田沢川と井水によって囲まれており、そうした地形をシマ（島）に見立てたのであろう。

ナカジマとは、一般には「川の中洲」をいうが、ここでは「流水に囲まれた中であって、島のようになっている所」を意味する。

②丸山誌には次のような記載がある。「ある年宮ヶ洞が荒れ、山ノ田の沢が洪水となって、下流一面が土石流に襲われた。ところがこの地域だけが土砂に埋まらず

残ったので、それから中島と呼ぶようになった」と。これも一説としたい。

全国地図にはナカジマ地名が多く、262ヶ所が、中・大字として記録されている。

#### 【北裏】

キタウラ。

この小字は三ヶ所にある。うち二つの小さな小字は、飯田線に沿ったその南側にあり、もう一つの大きな小字は中央公園の南西側にある。

キタウラとは何を意味するのか。二説を挙げる。

①キタウラとは「日蔭地」をいう（語源辞典）。飯田線に沿う部分が日蔭になっていたかどうか不安はある。

②キタ←キダ（階）と清音化したもので、「段丘」をいい、ウラは「下の方」のことか。すなわち、キタウラとは「段丘の麓の土地」ということになる。中央公園近くのキタウラがこの解釈にあてはまるかどうか。

全国地図には、キタウラ地名は49ヶ所が中・大字として記載されている。

#### 【窪田】

クボタ。

飯田東中学校の道路を隔てた北側にある細長い小字である。

クボタとは、クボ（窪）・タ（処）で、「窪んでいた所」を意味するものと思われる。

#### 【城山】

ジョウヤマ。

現在、風越こどもの森公園になっているところに、ジョウヤマ小字はある。郊戸八幡社の後の山地である。

ジョウヤマとは「城のあった所」であろう。

ジョウヤマについては「近藤六郎周家が松原宿に豪族として居を構えており、

外敵の侵入に備えて城山の台地に山城を築いたと伝えられている。この山城の築城は吉野朝時代の築城法にならって、城の後方に壕を作り、二条堀の内に館を築いたといわれ、形は崩れてしまったが、壕の跡をとどめている」(丸山誌)という。

#### 【今宮】

イマミヤ。

ジョウヤマ小字の北西側と南東側の二ヶ所に、この小字はあり、南東側の小字には、郊戸八幡社が鎮座する。

イマミヤ(今宮)とは「本宮に対して、その分社の称。また、本宮がなくて、新たにまつた神社をもいう」(国語大辞典)。

丸山誌によれば、イマミヤの八幡社は貞観二年(860)に山城国鳩嶺八幡宮から勧請したというが、あまりにも古いで、領主近藤六郎周家が宇佐八幡を勧請したといわれている建久三年(1192)のことであろうか。

それにしても古い話であるが、この建久三年あたりから、イマミヤ地名が伝えられてきているのかもしれない。

#### 【正庵山】

ショウアンヤマ。

県民飯田運動広場のある土地に、この小字はある。

ショウアンヤマとは何を意味するのか。ショウアンは固有名詞と考えざるを得ないが、そうであれば、ショウアンヤマとは「正庵が所有する山地」ということになるが、どうであろうか。

全国地図には、ショウアン小字が1ヶ所にあるが、「正安」という鎌倉後期の年号が宛てられているだけである。

#### 【押洞】

オシボラ。

王竜寺川に沿って長く延びる大きな小字と佐倉神社のある側稜の峰の一つに小

さな小字がある。

オシボラとは、字面の通りで、「小さな谷を土石流が押し出したところ」をいうのであろう。土石流が流れたのは、王竜寺川である。

全国地図には、なぜか、オシボラ地名もオシボラ地名も記載されていない。

#### 【丸山・小丸山】

マルヤマ・コマルヤマ。

マルヤマ小字は丸山町三丁目と飯田城の南側斜面にあり、コマルヤマ小字は丸山町の三丁目と四丁目にある。

マルヤマとは「形の丸く見える山」(国語大辞典)であるが、マルヤマ小字が必ずしも丸く見える山になっていない場合が多い。小字の範囲が変わってしまった場合もあるかもしれない。そこで二説を挙げる。

①マルヤマとは「形が丸く見える土地」か。あるいは、「すぐ傍に丸い山があるところ」かもしれない。

②マルヤマとは、「近くに円錐形の山が見える場所」を意味することもあったと思われる。神が鎮座する山、あるいは神が降臨する山とみていたのであろうか。

全国地図には、マルヤマ地名は多く、中・大字として352ヶ所が挙げられている。

#### 【中田】

ナカタ。

この小字は、丸山町三丁目に二ヶ所ある。

ナカタとは何をいうのか。二説を挙げる。

①ナカタとは、字面通りで「(上飯田の)中ほどにある田んぼ(土地)」をいうのであろうか。

②ナカタとは「集落の中にある田んぼ」であろうか。現在は集落の間に田んぼや畑・果樹園があるが、小字発生時にはど

うであったか。

#### 【山ノ田】

ヤマノタ。

山の田沢川上流部の右岸にある大きな小字である。なかに桜ヶ丘団地がある。

ヤマノタとは、文字通り、「山地に水田のあったところ」であろう。自然の湧水や谷川の水を利用して田んぼが作られていたのである。

全国地図には、ヤマノタ地名は13ヶ所に中・大字として記録されている。

#### 【五郎左衛門原】

ゴロザエモンハラ。

この小字は山の田沢川上流部の左岸に、二ヶ所ある。

ゴロザエモンハラとは、「山の中腹部にあって五郎左右衛門の所有する土地」をいうか。

#### 【宿】

シュク。

この小字は、丸山町二・三丁目の三ヶ所ある。

シュクは「旅人のとまる所。やど。また、宿屋の集まっている所」（広辞苑）をいう。シュクとは、「街道筋にあって旅人のとまる宿があったところ」であろうか。シュク小字の一部は、近藤六郎周家の館のあったという松原宿かもしれない。

全国地図にはシュク地名が非常に多く、231ヶ所が中・大字として記載があり、その全てが「宿」の字を宛てている。

#### 【砂場】

スナバ。

この小字は白山町二丁目と丸山町白山神社の近くの二ヶ所にある。

スナバとは、「砂地」をいうのであろう。砂地はどこにでもあるが、何か特別な意味があるのだろうか。

①「洪水のとき風越山から流れ来た土石流のうち、石は上の方に残し、砂だけを

流してきてここへ堆積した」（丸山誌）という。その通りであろうと思われる。

②近くにスナアゲバ（砂上場）小字がある。このことと関連して、もしかしたら、地震のときの液状化現象が住民を驚かせたのかもしれない。可能性は薄いですが、衝撃は大きい。

全国地図には、スナバ地名は14ヶ所に中・大字として挙げられ、その全てに「砂場」の字が宛てられている。

#### 【神ノ木】

カミノキ。

この小字は、丸山の山の田沢川と滝の沢川の間丘陵にあり、現在は殆どが住宅地になっている。広い小字である。

カミノキとは何か。三説を挙げたい。

①カミノキは岐阜や尾張などで使われている「こうぞ（楮）」の異名だという（国語大辞典）。従って、カミノキとは「紙の原料となる楮を栽培していた所」であろうか。

②カミは「神社領」で、ノキは伊那郡や水窪の方言で「家の裏手の土手」だという（語源辞典）。従って、カミノキとは「神社領の裏手にある土地」をいうのであろうか。神社とは白山神社のこと。

③カミは動詞カム（噛）の連用形で「水などが岩や砂を激しくえぐる」状態をいい、ノキは動詞ヌク（抜）の連用形ヌキが転訛した語で「崩壊地形、浸食地形」をいう（以上は語源辞典）。従って、カミノキとは「沿岸がえぐられて土石が流れた沢のある所」か。滝の沢川か山の田沢川による浸食をうけたところをいうのであろうか。

全国地図には、カミノキ地名は9ヶ所に中・大字として挙げられている。

#### 【紺屋垣外】

コンヤガイトかコウヤガイト。

この小字は、丸山町一丁目にあり、カ



ミノキ小字の下流側にある。現在は、果樹園や畑地が多い。

コンヤ（コウヤ）は「藍で糸や布を紺色に染めるのを業とする染物屋。江戸時代は農家の副業が多かったが、綿栽培が普及すると山着・仕事着のほか、夜具地や風呂敷などの染めの需要がふえ、明治時代になると村々に専業の紺屋が増加した」（民俗大辞典）という。

コン（ウ）ヤガイトとは、「染め物を副業としている屋敷のあった所」を意味するのであろうか。子どもの頃、コウヤサという屋号を聞いたことがある。

全国地図には、なぜかコウヤガイト地名もコンヤガイト地名も載っていない。

#### 【釜土】

カマド。

この小字は二ヶ所にある。一つは滝の沢川右岸にある大きな小字で、もう一つはその下流になるが滝の沢川の両側に跨がり、ツツミ小字に三方を囲まれた小さな小字である。

カマドとは何を意味するのか。二説を挙げる。

①丸山誌にある由来をそのまま挙げる。「白山権現の湯立の祭事で竈を築く土を得たところ。また一説に飯田城主が白山権現へ参詣したとき、寺で竈を築き湯を煮て茶を出したその竈の土を得たから」名づけられた小字であるという。すなわち竈を築く土を採取した場所をいう。  
②敢えて別の解釈を挙げておきたい。カマは動詞カム（噛）の連用形が名詞化した語で「えぐったような崖地」をいい、ドはド（処）のこと（以上は語源辞典）。従って、カマドとは「えぐられたような崩崖のあるところ」をいうのかもしれない。

全国地図には、カマド地名は9ヶ所に中・大字として挙げられている。

#### 【社前】

ヤシロマエ。

この小字は、滝の沢川と阿弥陀沢川の間であり、小字内には白山神社が祀られている。

ヤシロマエとは、字面の通りで「お宮の前の方」をいう。いうまでもなく、お宮とは白山神社を指す。

2. 5万分の1の全国地図には、なぜか、ヤシロマエ地名は記載が無い。

#### 【堤】

ツツミ。

この小字は滝の沢川の両岸にまたがっており、阿弥陀寺のほぼ東側と南東側にある。

ツツミは「灌漑用の水を蓄えている池」であろう。ツツミの名前は丸山誌をみてもはっきりしない。

全国地図には、ツツミ地名は60ヶ所が中・大字として挙げられており、少なくともは数字となっている。

#### 【平栗】

ヒラグリ。

この小字は二ヶ所にある。一つは大きな面積を有する小字で、丸山町の阿弥陀寺周辺に広がり、東部で一部は滝の沢川を越えている。もう一つは押洞沢川最上流部の右岸にある、小さな小字である。

ヒラグリとは何か。二説を挙げる。

①ヒラは黄泉平坂のヒラで「傾斜地」をいい、グリ＝クリで動詞クル（割）の連用形が名詞化した語。以上から、ヒラグリとは、「傾斜地で崩崖のあるところ」をいうのであろうか。

②クリはクリ（涅）で「湿地」をいう（語源辞典）。従って、ヒラグリとは、「傾斜地で湿地になっているところ」か。

全国地図には、ヒラグリ地名は5ヶ所に中・大字として挙げられており、その全てに「平栗」の字が宛てられている。

### 【阿弥陀寺・阿弥陀寺前】

アミダジ・アミダジマエ。

これらの小字は、現在の阿弥陀寺周辺にある。

木食弾誓が阿弥陀沢奥に庵を結んだのが、阿弥陀寺のはじまりで、その後、羽場のサツミ小字の地へ移り、さらに宝永二年（1705）に現地のセンタイブツ小字に遷座している（丸山誌）。

アミダジとは「阿弥陀寺のある土地」をいう。

アミダジマエ小字は阿弥陀寺周辺の四ヶ所にあるが、かつては一つなかりになっていたのであろう。だから現在は阿弥陀寺に後側になっていても、小字発生時にはアミダジマエ小字の大部分は「阿弥陀寺の前方」になっていたのであろう。

全国地図には、アミダジ地名が7ヶ所、中・大字として挙げられている。

### 【竹ノ内】

タケノウチ。

押洞沢川最上流部の右岸にある、小さな小字である。今宮グリーンクラブの縁にある。

タケノウチとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げたい。

①タケは「信仰と関係ある山の称」で、ウチはウチ（内）で、「圏内」をいうのであろうか。すなわち、タケウチとは「信仰の山である権現山の圏内にある土地」を意味するか。

②タケ＝ダケで「崩崖」をいい、ウチは動詞ウツ（打）の連用形が名詞化した語で「切り取られたような地形」をいう。以上から、タケノウチとは「切り取られたような地形になっている崩崖のある土地」をいう。

2. 5万分の1の全国地図には、タケノウチ地名は105ヶ所も中・大字として挙げられている。

### 【萩ヶ窪】

ハギガクボ。

この小字は、押洞沢川が王竜寺川に合流するところにある。

ハギガクボとは何か。これも語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①ハギガクボとは、字面の通りで「萩が自生している谷」をいう。

②ハギは動詞ハグ（剥）の連用形が名詞化した語で「崩崖」をいう。従って、ハギガクボとは「崩崖のある谷」をいうのかもしれない。

全国地図には、ハギガクボ地名は記載が無い。

### 【輝栗】

テルクリ。

この小字は、丸山町四丁目にあり、山の田沢川と王竜寺川の間であり、側稜の長い尾根になっている。

テルクリとは何をいうのだろうか。語源辞典に依りながら二説を挙げておきたい。

①テル←タル（垂）と転じた語で、「崩崖」をいい、クリはクリ（涅）で「湿地」の意。以上から、「崩崖のある湿地」か。尾根の頂上部はともかくとして、中腹部より下側には自然湧水があったと思われる。

②テルは「日当たりのいい所」で、クリは動詞クル（剝）の連用形が名詞化したもので「崩れ地」をいう。従って、テルクリは「日当たりがよく、崩れ地のある所」をいうか。

全国地図には、なぜかテルクリ地名は一つもない。

### 【北ノ原】

キタノハラ。

丸山のカミノキ小字の北隣にある小字。キタノは「北の方の」の意で、ハラはハラ（腹）で「山の中腹部」をいう。

以上から、キタノハラとは、「（白山神

社の) 北の方にある山の中腹部」をいうのであろう。

全国地図には、キタノハラ地名は中・大字として5ヶ所に記載がある。

#### 【新太屋敷】

シントヤシキ。

阿弥陀沢川と滝の沢川の上流部の間にある。堤はあるが、現在は果樹園と畑地が多く、水田は無い。

シントヤシキとは何を意味しているのか。二説を挙げる。

①シントは固有名詞であろうか。とすれば、シントヤシキとは「シントの屋敷があったところ」か。

②シントにはシント(新田)の意がある(語源辞典)。すなわち、シントヤシキとは「新田開発者の屋敷があった所」となるがどうであろうか。現在は田んぼは無いが、小字発生時には、自然湧水を利用した田んぼがあったかもしれない。

全国地図にはシントヤシキ地名はないが、シント地名は中・大字として2ヶ所が挙げられており、いずれも「新田」の字が宛てられている。

#### 【滝ノ沢】

タキノサワ。

この小字は二ヶ所にある。いずれも滝の沢川の沿岸にあるが、一つは上流側にもう一つは下流側の白山神社の西側にある大きな小字であり、阿弥陀沢川と滝の沢川の間にある。

タキ(滝)には、二つの意味があるが、ここでは「河の瀬の傾斜の急な所を勢いよく流れる水」をいう。

すなわち、タキノサワとは「急な傾斜地を勢いよく流れる谷川のあるところ」をいうのであろう。

全国地図には、タキノサワ地名は中・大字として133ヶ所も挙げられている。宛てられている文字には全てに「滝」と

「沢」がある。

#### 【三見堂】

サミドウ。

この小字は丸山町のシモヤシキ小字とシュク小字の間にある。現在は住宅地と畑地になっている。周辺の住宅地と果樹園と墓地が多い。

サミには、田んぼや湿地に関わる意味もあるが、ここでは採り上げない。

サミはサンマイ(三昧)が転じたものと思われる。ある時期に、「三昧」をサミと読んでしまったのではないだろうか。サンマイドウ(三昧堂)は「墓所にある葬式用の堂」(広辞苑)をいう。

以上から、サミドウも同様に「墓所にある葬式用の堂」としたい。

全国地図には、サミドウ地名もサンミドウ地名も記載は無い。

#### 【権現山】

ゴンゲンヤマ。

滝の沢川の沿岸にあり、上流側のタキノサワ小字のすぐ下流側にある小さな小字である。

この小字が発生した時には、もっと大きな面積を有していたと思われるが、ゴンゲンヤマとは「白山権現を祀った山」であろう。

現在、風越山といわれている山は、子どものゴンゲンヤマと呼んでいた。

全国地図にもゴンゲンヤマ地名は多く、中・大字として67ヶ所が記載されている。うち66ヶ所に「権現山」の字が宛てられている。

#### 【清水平】

シミズダイラ。

大平の北西端にある小字。

シミズダイラとは、字面の通りで「清水が湧き出ているところ」をいうのであろう。

全国地図には、シミズダイラ地名は5

ヶ所に記載がある。

#### 【川端平】

カワバタダイラ。

この小字は黒川の支流である奥石沢川に沿ってその兩岸にある。

ダイラは、タイラで「盆地」をいう。長野県で使われているという。

従って、カワバタダイラとは、「川に沿って盆地状になっている所」をいうか。

全国地図には、カワバタダイラ地名は記載が無い。

#### 【中平】

ナカダイラ。

この小字は、大平の中心部を占める広い面積になっている。

ナカダイラとは、「集落のある盆地の中心部」をいうのであろう。

全国地図には、ナカダイラ地名は4ヶ所が、中・大字として挙げられている。

#### 【別道・別途】

ワカレミチ。

これらの小字は、大平街道の本道からわかれて摺古木山方面に向かう道に添っている。

ワカレミチとは「本道から分かれ出た道」（国語大辞典）をいう。

従って、ここのワカレミチとは「本道から分かれた道路近くにある土地」をいうのであろう。

全国地図には、ワカレミチ地名は載っていない。

#### 【雉子平】

キジダイラ。

この小字はワカレミチ小字の上流側にある。

この場合のダイラ＝タイラは「山中の緩傾斜地」をいうのであろうか。

キジダイラとは何を意味するのか。三説を挙げたい。

①キジは「木地師の住んでいた所」では

ないだろうか。すなわち、キジダイラとは「木地師が住んでいた山中の緩傾斜地」を意味するか。

②あるいは、単に、キジダイラとは「雉子の多い山中の緩傾斜地」であったか。

③キジ←キシ（岸）と濁音化した語で（語源辞典）、キジダイラとは、「山中にある川辺の緩傾斜地」をいうか。川は黒川を指すのであろう。

全国地図には、なぜか、キジダイラ地名は一つの記録が無い。

#### 【上總六・下總六】

カミソウロク・シモソウロク。

これらの小字は大平の西部にある。

ソウロクとは何か。わかりにくい地名である。三説を挙げる。

①ソウロクは固有名詞かもしれない。であれば、カミソウロクは「上流側にあるソウロクの所有地」ということになる。屋敷もその地籍内にあったのであろう。

②ソウはソフ（添）の意で、ロクはカに「鹿」の文字を当てて読み替えたもので、カハ（川）の略としたものではないかという（以上は語源辞典）。つまり、ソウロクとは「川沿いの土地」をいう。この川は小黒川を指す。やや無理気味か。

③ソウ←サハ（沢）が転じた語で、ロクは「鹿」を読み替えたもので、シカース（砂）・カ（処）と転じた語ではないかという（以上は語源辞典）。従って、ソウロクとは、「沢が流れている砂地の土地」を意味することもある。これも行き過ぎか。

全国地図にはソウロク地名は記載が無い。

#### 【下平】

シモダイラ。

この小字はナカダイラ小字の下流側に三ヶ所ある。

シモダイラとは「ナカダイラ小字の下流側にある土地」を意味する。

全国地図には、シモダイラ地名は、中・大字として4ヶ所に挙げられている。

#### 【坂下平】

サカシタダイラ。

この小字は黒川左岸の傾斜地にある。

サカシタダイラとは、「坂道の下の方にある山中の緩傾斜地」をいうか。

全国地図には、サカシタダイラ地名は載っていない。

#### 【五郎エ端】

ゴロベエバタか。

この小字は、黒川氾濫原から黒川右岸に及ぶ広大な面積を有している。

ゴロベエバタとは、「ゴロベエが所有していた畑のあったところ」をいうのであろうか。屋敷もこの土地にあったのであろう。

もちろん、全国地図にはゴエベエ地名は載っていない。

#### 【鰻沢】

カジカサワ。

この小字は黒川左岸の傾斜地にあつて、中を鰻沢という谷川が流れている。

カジカサワとは何か。二説を挙げる。

①カジカサワとは文字通りで「鰻が多い谷川のある土地」か、「河鹿蛙が多い谷川のある土地」か。

②カジは動詞カジル（嚙）の語幹で「引っ掻かれたような地形」をいう（語源辞典）。カジ・カ（処）で、カジカサワとは「崩崖があり、谷川が流れているところ」をいうのであろうか。

全国地図には、カジカサワ地名は2ヶ所に中・大字として挙げられており、いずれも「鰻沢」の字が宛てられている。

#### 【松ノ木平】

マツノキダイラ。

大平の北東部にある小字である。

マツノキダイラとは何をいうのか。二説を挙げる。

①マツノキダイラとは、字面の通りで「松の木の多い山中の緩傾斜地」をいうか。

②ノキ←ヌキ（抜）と転訛したか。ウ段←オ段の母音変化は中世前後の後半に多くなっているという（国語学大辞典）。ヌキは動詞ヌク（抜）の連用形が名詞化した語で、「崩落地」をいうのであろう。以上から、マツノキダイラとは「赤松が自生しており、崩落地にある山中の緩傾斜地」としたい。

2. 5万分の1全国地図には、マツノキダイラ地名は6ヶ所に中・大字として挙げられている。

#### 【大川端】

オオカワバタ。

この小字は黒川左岸の傾斜地にあり、諏訪社の周辺を囲んでいる。

オオカワバタとは、字面の通りで「大きな谷川の沿岸の土地」をいう。オオカワとは黒川のこと。

全国地図にも、オオカワバタ地名は5ヶ所に中・大字として記載がある。

#### 【宮平】

ミヤダイラ。

大平諏訪社の東側斜面にある。

ミヤダイラも字面の通りで、「諏訪社のある山中の緩傾斜地」をいうのであろう。

全国地図には、ミヤダイラ地名は14ヶ所に中・大字として記載があり、いずれも「宮平」の文字が宛てられている。

#### 【櫻町】

サクラマチ。

飯田市の町の中にある小字である。

瑞祥地名であるが、元来はどういう意味であったのか。これも難しい地名である。

サクラとは何か。二説を挙げたい。

①サクラはサク・ラ（接尾語）で、サクは形容詞サクイの語幹で「こわれやすい。裂けやすい」の意で、ラは事物をおおよ

そに示す接尾語。(以上は国語大辞典) 以上からサクラとは「崩れやすい崖のあるところ」をいうか。大宮諏訪神社の段丘崖か、あるいは野底川の谷を指しているのであろうか。

②サクラはサ(接頭語)・クラ(倉)で、「倉庫があった場所」であるかもしれない。救荒のための穀物貯蔵庫だったのであるか。サは語調を整える接頭語であるという(語源辞典)。

全国地図にはサクラマチ地名は66ヶ所に中・大字として挙げられている。瑞祥地名であるためか、多い。

#### 【傳馬町】

テンマチョウ。

この小字は、十ヶ所以上にある。

テンマチョウとは「江戸時代、伝馬役あるいは伝馬を業とする者が住んでいたところ」をいう(国語大辞典)。

伝馬とは「公用の人荷輸送に使われた馬。…戦国大名のなかには領国に伝馬役を課した例が多く、江戸幕府はそれを継承して全国に拡大させた。江戸時代の伝馬は公用旅行者や物資を宿継で送る宿場の馬をさすが、宿場の人足を含め、助郷が出した人馬もいった」という(岩波日本史辞典)。

ナカンチョウ小字に、天満宮普門院がある。この天満宮がテンマチョウに関わることも考えられないわけではないが、テンマチョウ小字の分布が広いことから、ここでは採り上げないことにした。

全国地図にはテンマチョウ地名は、中・大字として9ヶ所が挙げられているが、意外と少ない感じがする。

#### 【町裏】

マチウラ。

町中の七ヶ所ほどにある小さな小字である。

マチウラとは、「町のなかの小さな土地」

をいうのであろうか。表通りに面したマチウラ小字もあり、国語大辞典には「町のなか」をマチウラとしている。

全国地図には、マチウラ地名は15ヶ所に中・大字として挙げられている。

#### 【袋崎】

フクロザキ。

この小字は二ヶ所にある。

フクロザキとは何か。当時の地名もはっきりしない場所の地名であるが、国語大辞典に依りながら、二説を挙げたい。

①フクロとは「袋小路」をいい、ザキ←サキ(崎)と濁音化した語で、「末端」をいう。従って、フクロザキとは「道の末端部が袋小路になっているところ」をいうのであろうか。現在は袋小路にはなっていないが、小字発生時には、行き止まりになっていたかもしれない。

②フクロは「川と川とが落ち合った場所」をいい、サキはサキ(裂)で「崩落地」(語源辞典)を意味する。すなわち、フクロザキとは「崩落地があり、水路が合流しているところ」かもしれない。

全国地図には、フクロザキ地名は2ヶ所に、中・大字として挙げられている。

#### 【下袋町】

シモフクロマチ。

この小字は二ヶ所にあり、いずれもフクロザキ小字に接する、小さな小字になっている。

シモヒクロマチとは「フクロザキ小字に接し、それより少し低い土地」をいうのであろうか。

全国地図には、フクロマチ地名は7ヶ所に中・大字として挙げられているが、シモフクロマチ地名は1ヶ所のみとなっている。

#### 【破座場】

ハザバ。

この小字はテンマチョウ小字に囲まれ

ている。

ハザバとは何を意味しているのか。

ハザバ←ハサバと濁音化した語で「稲かけを設備してある場所」をいう（国語大辞典）。飛騨や新潟の方言だとあるが、この地方では、近年まで使われていた。現在は町場になっているが、小字発生時には近くに田んぼがあったのであろう。

稲干場は、この地方の小字ではイナバとなっていて、ハザバとなっているのは、今のところ、ここしかないことが気になる。

全国地図には、ハザバ地名は記載がない。伊那谷南部特有の地名であろうか。

#### 【江戸町】

エドマチ。

この小字は、野底川と谷川の間にある。

エド←エトと濁音化したもので、エトはエ（江）・ト（処）で「水のある所。川のある所」をいう（語源辞典）。

以上から、エドマチとは「川に挟まれて、自然湧水もある人家の集まっている土地」をいうのであろう。

全国地図には、エドマチ地名は、中・大字として、1ヶ所にだけ記載がある。

#### 【江戸町尻】

エドマチジリ。

この小字はエドマチ小字のハマイバ小字境にある。

エドマチジリとは「江戸町の末端部にある土地」を意味する。

#### 【可休屋敷】

カキュウヤシキ。

この小字は、エドマチ小字とエドマチジリ小字の間に挟まれている。

カキュウは固有名詞と思われる。僧侶か隠居した者の名前であろうか。

カキュウヤシキとは「可休の屋敷があったところ」を意味するのであろう。

カキュウ地名は全国地図には無い。

#### 【中ノ町】

ナカンチョウ。

この小字はサクラマチ小字やエドマチ小字・ババンチョウ小字に囲まれている。

ナカンチョウとは「飯田の町の中心部にあるところ」をいうか。

全国地図には、ナカンチョウ地名は1ヶ所に、中・大字として挙げられている。

#### 【外記屋敷】

ゲキヤシキ。

この小字はエドマチ小字の南隣にある。ゲキは職名か固有名詞か。固有名詞の方が可能性が高いかもしれない。

従って、ゲキヤシキとは「外記の屋敷のあった所」であろう。

全国地図には、ゲキヤシキ地名は記載が無い。

#### 【江戸町外記屋敷】

エドマチゲキヤシキ。

小さな小字が二つあり、その間にゲキヤシキ小字がある。

エドマチゲキヤシキとは、「江戸町にあった外記の屋敷跡」か。

#### 【外記屋敷馬場】

ゲキヤシキババ。

この小字はゲキヤシキ小字の西隣にある。

ゲキヤシキババとは「外記屋敷内にある馬場のある所」をいうのであろう。

#### 【馬場】

ババ。

この小字はゲキヤシキ小字の南隣にある。谷川の谷を越えた飯田城の北側になる。

ババは「乗馬の練習をする場所」（国語大辞典）をいう。外記屋敷にある馬場と合わせて飯田藩士の馬術の訓練が行われていたのであろうか。

全国地図には、ババ地名は中・大字として252ヶ所も挙げられている。

### 【馬場町】

ババンチョウ。

この小字は「外記屋敷馬場」や「馬場」小字に接しており、谷川左岸にある。

ババンチョウとは「馬場のある人家の集まっているところ」であろうか。

全国地図には、ババンチョウ地名は、1ヶ所だけ、中・大字として挙げられており、「馬場町」の字が宛てられている。

### 【元演武所】

モトエンブシヨ。

ババ小字やゲキヤシキ小字の東隣にある小字。

エンブシヨ（演武所）は「武芸の稽古をする場所」であろう。

従って、モトエンブシヨとは「武芸の稽古をする場所だったところ」をいうのであろう。飯田藩士の武芸稽古場があったのであろう。

全国地図には、モトエンブシヨ地名もエンブシヨ地名も記載が無い。

### 【演武所下】

エンブシヨシタ。

この小字は、モトエンブシヨ小字の南東隣にある。

エンブシヨシタとは、字面の通りで、「飯田藩の演武所のあった場所から少し下がったところ」をいうのであろう。

### 【眞虫坂】

マムシザカ。

この小字は、東中央通りの北東側傾斜地にある。

マムシザカとは、文字通り「毒蛇であるマムシの多い坂道」をいうのであろう。

全国地図には、マムシザカ地名は、なぜか載っていない。

### 【馬場下坂】

ババシタザカ。

この小字は、ババ小字から下る坂道にある。

ババシタザカとは、字面の通りで「ババ小字の下の方にある坂道のあるところ」であろうか。

全国地図には、ババシタザカ地名は無いが、ババシタ地名は5ヶ所に中・大字として挙げられている。

### 【馬場町坂】

ババンチョウザカ。

この小字はババンチョウ小字の段丘から谷川に下る斜面にある。

ババンチョウザカとは、「ババンチョウ小字に登る坂道」をいう。

### 【榎谷下】

エノキダニシタ。

谷川の谷の北東側の斜面に二ヶ所ある。かつては繋がっていたのであろうか。

エノキダニシタとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げたい。

①副詞シタシタはシトシトに通じ、シタは「湿地」をいう（語源辞典）。従って、エノキダニシタとは「エノキが自生している谷で湿地になっているところ」をいうのであろうか。

②あるいは、エノキはエ（江）・ノキ（抜）で、「流水のある崩壊地」をいう。エノキダニシタとは、「谷川が流れ崩壊地もある谷の麓に近いところ」をいうか。

全国地図には、エノキダニ地名は4ヶ所が中・大字として記載があるが、エノキダニシタ地名は無い。

### 【主税町】

チカラマチ。

この小字は赤門の周辺にある。

チカラとは「租（たちから）すなわち納官される稲をもさす。また、納官された租を税（ちから）という」（国語大辞典）。

以上からチカラマチとは「貢租を扱う役人が住んでいた町」であろうか。納官された米などを保管する倉庫がサクラマチ小字にあったとすれば、辻褄は合う。



しかし、全国地図にはチカラマチ地名は、中・大字として、1ヶ所にだけ挙げられているにすぎない。

#### 【谷川南堀】

タニガワミナミホリ。

この小字は、谷川とチカラマチ小字の北東側斜面の間にある。

タニガワミナミホリとは、字面の通りで、「谷川の南側右岸に掘られた堀のあるところ」を意味する。谷川の谷をさらに掘り下げたのであろうか。

#### 【櫻ノ丸北谷・櫻ノ丸下堀】

サクラノマルキタダニ・サクラノマルシタボリ。

キタダニ小字は、城内の平坦地のすぐ北側にあり、シタボリ小字はその下側にある。

サクラノマルのマル（丸）は、中・近世の城郭で城を構成する部分の呼び名であらう。サクラノマルはチカラマチ小字と重なる場所にあった。

従って、サクラノマルキタダニ小字もサクラノマルシタボリ小字も、現在の県の合同庁舎の北東側斜面になる。

キタダニは谷をそのまま堀にし、シタボリはさらに掘り下げて堀を深くしたところであらう。

#### 【御亭之平】

オチンノタイラ。

この小字は、チカラマチ小字の東隣にあり、城内の北部になる。

チン（亭）は「眺望または休憩のため庭園に設けた風雅な建物」をいう（広辞苑）。オ（御）は接頭語で「敬意」を表すのであろう。

従って、オチンノタイラとは「城内庭園の四阿屋のあった平坦地」をいうのであろう。

全国地図には、オチン地名もチン地名も記載されていない。

#### 【二ノ丸・二ノ丸下・二ノ丸北】

ニノマル・ニノマルシタ・ニノマルキタ。

ニノマル小字は、現在、美術博物館がある。ニノマルシタは、その南側と西側の傾斜地にあり、ニノマルキタはその北側にあたる。

ニノマルキタ小字の一部が、長姫神社の東側斜面にあるが、これは北西側にある、大きなニノマルキタ小字と繋がっていたためであらうか。

#### 【二ノ丸堀埋地】

ニノマルホリウメチ。

この小字があるのは、現在は飯田建設会館がある土地である。

文字通りに、「二ノ丸を埋め立てた土地」であらう。西隣は「御亭之平」小字になっている。

#### 【元本丸・本丸下・本丸南下】

モトホンマル・ホンマルシタ・ホンマルミナミシタ。

モトホンマル小字には、現在、長姫神社と三宜亭がある。「本丸があったところ」をいう。

ホンマルシタ小字は、本丸の北～東側傾斜地に二ヶ所ある。いうまでもなく「本丸の下方の土地」をいう。

ホンマルミナミシタは本丸の南側に二ヶ所あり、もちろん「本丸の南側の斜面にある土地」をいう。

#### 【熊野】

クマノ。

この小字は飯田城の最東部にあり、山伏丸があったところといわれている所にある。

山伏は「修験道の宗教的指導者。当初は密教の験者が山岳で修行して加持祈祷に効験をもたらす験力を修めたことをさす語だった。…山伏十六道具と呼ばれる独自の衣体や法具をもって山岳に入って

修行した。山伏が修行した霊山は中央では吉野から熊野に至る大峰山、地方では羽黒山、白山など全国各地に及んでいる」という（民俗大辞典）。

山伏と熊野との間に深い関係のあることがわかる。クマノ小字には、熊野権現でも祀られていたのであろうか。

全国地図には、クマノ地名は30ヶ所が中・大字として挙げられており、うち29ヶ所は「熊野」の字が宛てられている。

#### 【山伏丸下】

ヤマブシマルシタ。

この小字は、モトホンマル小字の北東側傾斜地にある。

ヤマブシマルシタとは、「山伏丸のあったところから下の方の土地」をいう。山伏丸のあった所というのは、クマノ小字の地をいう。

#### 【水ノ手・水ノ手坂尻】

ミズノテ・ミズノテサカジリ。

これらの小字は松川氾濫原とその近くの斜面にある。

ミズノテには「城やとりでの中に飲料として引く水。また、その水路」（国語大辞典）の意がある。しかし、飯田城の麓にある小字なので、当時の技術では、ここから飲料水を引くことはできない。残念ながら、ここで、魅力のあるこの解釈を採ることはできない。

飯田城へ引いた井水には上飯田井（後の御用水）があった。

では、ミズノテとは何を意味するのか。ミズノテには「川や堀など、水のある地方」（国語大辞典）という意味もある。従って、ミズノテとは、単に「流水のある土地」をいうのであろう。流水とは、もちろん、松川を指す。

ミズノテサカジリのサカジリ（坂尻）は「坂道の登り口」を意味する（国語大

辞典）。山梨県や上伊那郡の方言であるという。従ってミズノテサカジリとは「松川の川原からの登り口のある所」をいう。この登り口は飯田城に通じている。

#### 【丸山】

マルヤマ。

この小字は、飯田城の南側斜面の麓にある。

マルヤマ（丸山）といえ、円形・円錐形の山か円墳をいうことが多い（語源辞典）。しかし、ここにはそれらが無い。ただ、見上げれば、デマル小字の地は丸山に見えたのであろうか。

マルヤマとは、とりあえず「近くに丸山が見えるところ」としておきたい。

マルヤマ小字は伊那谷南部には多いし、全国地図にも352ヶ所にマルヤマ地名が中・大字として挙げられている。

#### 【出丸・出丸南下】

デマル・デマルミナミシタ。

デマル小字は、現在、追手町小学校のある所、デマルミナミシタ小字は、デマル小字の南側傾斜地にある。

出丸は「本城から張り出して築いたくわ」（広辞苑）をいう。

デマルミナミシタとは何か。二説を挙げる。

①シタを「下の方」と解する。デマルミナミシタとは「本城から張り出して築いた郭の南側の斜面」か。

②シタを「湿地」とすると、デマルミナミシタとは「本城から張り出して築いた郭の南側の湧水のある所」の意かもしれない。

#### 【三ノ丸内】

サンノマルウチ。

この小字は、デマル小字とニノマル小字の間の浅い谷部にある。

ウチーフチ（縁）と転じたか。サンノマルウチとは「三ノ丸の縁にある土地」

をいうのであろうか。

しかし、この小字図には三の丸は無い。『飯田・上飯田の歴史 上』（飯田市歴史研究所）の江戸時代の飯田城下図によれば、デマル小字の北西隣にあり、サクラマチ小字になっている場所となっている。とすれば、サンノマルウチ小字とサンノマル小字はかなり離れているといわざるをえない。どこかに間違いがあるのか、あるいは解釈が十分でないのか。よくわからない。

#### 【常盤町】

トキワマチ。

サクラマチ小字とアラマチ小字に囲まれた小さな小字である。

トキワマチとは何を意味するのか。敢えて二説を挙げる。

①トキワとは「永遠に変わらない」意で瑞祥地名として名づけられたもので、「永遠に変わらない町」をいうのであろう。

②トキワ←トコ（床）・ハ（端）と転訛した語で、「小高くなっていて平らな所」をいう。従って、トキワマチとは「小高く平らな地にある町」かもしれない。

全国地図には、トキワマチ地名が、中・大字として13ヶ所に挙げられており、宛てられている字は「常磐町」が7ヶ所、「常葉町」が6ヶ所となっている。

#### 【松尾町】

マツオマチ。

この小字は、中央公園の北側にある。

マツは「アカマツが自生している土地」をいうか。オは「山裾の末端部」であろうか。以上から、マツオマチとは「アカマツが自生していた山裾の末端部にある町」を意味するか。あるいは、単なる瑞祥地名かもしれない。

全国地図には、マツオマチ地名は6ヶ所に中・大字として挙げられており、うち5ヶ所には「松尾町」の字が宛てられ

ている。

#### 【荒町】

アラマチ。

この小字はバイナン小字群の近くと東野に一ヶ所ずつある。

アラマチとは何か。語源辞典に依りながら、二説を挙げる。

①アラはアラ（新）で「新しい」ことをいう。すなわち、アラマチは「新しくできた町」であろうか。

②アラはアラ（荒）で「川の流れの激しい所」をいう。アラマチとは、「堤防ができる前の谷川の氾濫があった所にできた町」をういのかもしれない。

全国地図には、アラマチ地名は92ヶ所に中・大字として挙げられており、うち62ヶ所に「荒町」の字が、20ヶ所には「新町」の字が宛てられている。

#### 【殿町・殿町裏】

トノマチ・トノマチウラ。

これらの小字は飯田病院の東側にある。

トノマチウラは文字通りで「トノマチ小字の裏手の土地」をいうのであろう。ではトノマチとは何か。これも語源辞典に依りながら二説を挙げたい。

①トノマチとは「殿と呼ばれた貴人の屋敷のあった町」であろうか。貴人が誰であるかは不明。

②トノ←タナ（棚）と転じたもので、「棚状の地」をいう。従って、トノマチとは「棚状の地にある町」をいうか。扇状地の緩傾斜地になっており、わずかながらも高低差はある。

全国地図には、トノマチ地名は26ヶ所に記載があり、うち25ヶ所は「殿町」の字が宛てられている。

#### 【梅南・梅南裏・梅南小路・梅南小路裏】

バイナン・バイナンウラ・バイナンコウジ・バイナンコウジウラ。

これらの小字はトノマチ小字の北隣に

ある。

バイナンウラとは「バイナン小字の裏手の土地」をいい、バイナンコウジウラとは「バイナンコウジ小字の裏手の土地」を意味するのであろう。

ではバイナンとは何か。二説を挙げる。

①バイナン←バイ（唄）・ナム（並）と変化した語で、「唄師の住居が並んでいるところ」か、あるいは「唄があちこちから聞こえるところ」であろう。唄とは「仏教儀式で唱える歌謡。漢語または梵語で偈・頌を詠歌し、三宝の功德を賛嘆するもの」をいい、唄師は「大法会で四箇の法要の一つである梵唄の任に当たり、如来唄などを歌詠する僧」をいう（以上は国語大辞典）。従ってバイナンコウジとは「唄があちこちから聞こえる狭い路」か、あるいは「唄師の居住地が続く狭い路のある所」をいうのであろう。近くには峯高寺・真光寺・長源寺がある。

②バイはバイ（馬医）か。近くにはテンマチョウ小字やババンチョウ小字がある。つまり、バイナンコウジとは「馬医の住宅が並んでいる狭い路のあるところ」かもしれない。

全国地図には、バイナンコウジ地名はもとより、バイナン地名も記載が無い。

【峯高寺・真光寺裏・長源寺裏・長源寺境内・柏心寺裏・下大雄寺・西教寺裏・龍翔寺裏・元龍翔寺】

寺院に関わる小字である。寺院名がそのまま小字名になっているのは、峯高寺のみである。原因ははっきりしないが、寺名を小字名にするのには何らかの抵抗があったのであろう。神社名についても、「〇〇神社」という小字名は見かけなかったように思う。寺社ともに名称をそのまま小字名にするのが憚られたものと思われる。

由来については省く。

## 【川原】

カワラ。

この小字は松川沿いにある。

カワラとは、文字通り「川辺の水がなくて砂石の多い所」（広辞苑）をいう。

ありふれた地名で、2.5万分の1全国地図にも、中・大字として126ヶ所に挙げられている。

## 【箕瀬・箕瀬裏】

ミノゼ・ミノゼウラ。

これらの小字は、松川の段丘崖に近い段丘の南西部にある。

ミノゼとは何を意味するのか。地元には伝えられている由来を挙げる。

ミノゼ←ミノ（美濃）・ゼイ（勢）と転じたもので「美濃からやってきた人達が多いところ」をいう。その通りであろう。

ミノゼウラとは「ミノゼ小字の裏手の土地」であろうか。ミノゼ小字に二方向を囲まれて、谷川溪谷の縁側にある。

全国地図には、ミノゼ地名は記載されていない。

## 【長藏堀】

チョウゾウボリ。

この小字は、箕瀬西部にあり、ハバマスガタ小字の北側に長く延びている。

チョウゾウとは固有名詞であろう。この堀も飯田城を守る外堀の一つであったと思われる。この堀に何らかの関わりをもった人物が長藏ではなかったか。

従って、チョウゾウボリとは「長藏が関与した外堀のあるところ」をいうか。

むろん、全国地図には、チョウゾウボリ地名は記録されていない。

## 【羽場枅形】

ハバマスガタ。

谷川溪谷に臨む段丘の縁にある。

マスガタ（枅形）とは「城門を前後二重に設け、その間の四角な平地の周囲に石垣を造り、出陣のとき軍勢が集まる所。

また、ここで表の門を打ち破ってはいった敵を攻撃する」(国語大辞典)。

従って、ハバマスガタとは「羽場にある石垣に囲まれた四角な平地になっている所」をいうか。門との関係ははっきりしない。

全国地図には、ハバマスガタ地名は無いが、マスガタ地名は7ヶ所に中・大字として挙げられている。

#### 【神野】

カミノあるいはカンノ。

この小字は、谷川溪谷の段丘崖の傾斜地に二ヶ所ある。

カミ(ン)ノとは何か。二説を挙げておく。

①カンノ←カリ(刈)・ノ(野)と撥音便化した語で、「馬や牛の飼料にする雑草を刈る地」(国語大辞典)か。傾斜地であるので、この解釈はあり得る。

②カミは動詞カム(噛)の連用形が名詞化した語で、ノ(野)は「野原」をいう(以上は語源辞典)。従って、カミノとは「崩崖のある野原」かもしれない。

全国地図には、カミノ地名は24ヶ所に中・大字として挙げられており、うち19ヶ所には「上野」の字が宛てられている。また、カンノ地名は8ヶ所にあり、うち4ヶ所は「神野」の字になっている。

#### 【吉政・吉政平】

ヨシマサ・ヨシマサヒラ。

これらの小字は松川氾濫原、段丘崖、その上の段丘縁に五ヶ所ほど分布している。

中世、飯田郷を支配した坂西長國の父、坂西由政は愛宕の吉政に住んだとされている(『鼎の地名』から)。

ヨシマサとは「坂西由政の住んでいたところ」をいうか。

ヨシマサヒラとは「坂西由政の屋敷があった傾斜地」か。

ヨシマサは固有名詞と思われるが、全国地図にはヨシマサ地名が3ヶ所、中・大字として挙げられており、その全てに「吉政」の字が宛てられている。

#### 【愛宕平・愛宕山・愛宕坂・愛宕下】

アタゴヒラ・アタゴヤマ・アタゴザカ・アタゴシタ。

これらのアタゴ小字群は、松川氾濫原とその上の段丘崖にある。

アタゴは愛宕権現にかかわる地名である。京都にある標高924mの愛宕山上に古来、愛宕権現として広範な信仰を集めている愛宕神社がある。愛宕社の祭神は鎮火の神として信仰され、全国各地に広まった。愛宕権現は早くから神仏の混淆が行われ、中世中期に現れた本地仏勝軍地蔵はその名称から中世武士階層の尊崇を集めた。また民間にあっては、鎮火・防火の神として信仰圏を拡大したという(民俗大辞典)。

以上からも、ここ飯田の愛宕権現は、坂西氏の勧請によることが推測できる。

アタゴヒラは「愛宕権現の境内にある傾斜地」か。アタゴヤマは「愛宕権現を祀る地」を、アタゴザカは「愛宕権現に詣でる坂道」を、アタゴシタは「愛宕権現の境内の下方の土地」をいうのであろうか。

権現は明治維新の神仏分離の影響を強く受けている。現在の「愛宕稲荷神社」の名称はその時に付けられてものであるうか。

全国地図には、中・大字として、アタゴ地名は31ヶ所にあり、アタゴヤマ地名は106ヶ所にも残されている。

#### 【北畑】

キタバタ。

この小字は、愛宕稲荷神社の北側の急傾斜地にある。

キタバタはキタバタ(北端)で、「お宮

の北端にある土地」をいうのであろうか。

全国地図には、キタバタ地名は11ヶ所にあり、いずれも中・大字として登録されている。

#### 【南平】

ミナミダイラ、あるいはミナミヒラか。

この小字もお宮の南側急傾斜地にある。

ミナミダイラであれば「お宮の南側にある中腹から麓のあたり」で、ミナミヒラであれば「お宮の南側にある傾斜地」を意味する。

全国地図には、ミナミダイラ地名は中・大字として13ヶ所に、ミナミヒラ地名は4ヶ所に記載がある。

#### 【洞】

ホラ。

この小字は、愛宕稲荷神社北側にある王竜寺川の沿岸にある。

ホラは「(王竜寺)川によって浸食された谷」をいう。

全国地図には、ホラ地名は26ヶ所に中・大字として挙げられており、その全てに「洞」の字が宛てられている。

#### 【藪下】

ヤブシタ。

この小字は南常盤町の斜面の麓にある。現在は住宅地が多いが、かつての小字発生時には、北側の斜面はヤブ(藪)になっていたのであろう。

ヤブは「低木・草・竹などが手入れもされず乱雑に生い茂っているところ」(国語大辞典)である。

この地方には、ヤブ関連小字が多い。ということは、何も手の入らない土地が目立つということであるから、その土地には単なるヤブ意外の意味も込められているものと考えたい。それは、激しい祟りを発現するといわれている藪神の鎮座する場所であったのではないだろうか。

すなわち、ヤブシタとは「手の入れに

くいヤブの下側の土地」としておきたい。

全国地図には、ヤブシタ地名は記載されていない。

#### 【反高場】

ソリタカバ。

この小字は、南常盤町の谷川溪谷崖の麓にある。

ソリタカバとは何を意味するのか。語源辞典に依りながら二説を挙げたい。

①ソリは動詞ソル(反)の連用形が名詞化した語で「のけぞるような傾斜地」をいい、タカバ=タカハ(高端)で、「緩傾斜地の最も高いところ」であらうか。それ以上は急傾斜地になっている場所を指していると解したい。以上から、ソリタカバとは「背後にのけぞるような急傾斜地を控えた麓の最も高いところ」をいうのであろうか。

②タカバはタカバ(鷹場)で「鷹狩をする場所」をいうのかもしれない。この町場の近いところで鷹狩は考えにくいのであるが、すぐ近くにトヤバ小字もあるので、挙げておきたい。すなわち、ソリタカバとは「急傾斜地の麓にある鷹狩をする場所」をいうのかもしれない。

全国地図には、ソリタカバ地名は記載が無い。

#### 【鳥屋場】

トヤバ。

松川に添った氾濫原にある小字。

トヤバとは何か。民俗大辞典に依りながら二説を挙げたい。

①トヤバとは「捕鳥場」をいう。中部地方に多い、渡り鳥の狩猟法で、ツグミ・ホオジロ・ヒワなどが対象であったが、現在は禁止されている。

②近世、鷹狩用の鷹を飼育する小屋を鳥屋ということもあつたらしい。トヤバとは「鷹狩り用の鷹の飼育する小屋のあつたところ」をいうか。

全国地図には、トヤバ地名は2ヶ所に中・大字として挙げられているに過ぎない。伊那谷南部のトヤあるいはトヤバ小字の数からみて、少ない感じがするのは、トヤ小字群が伊那谷南部の特徴的な地名であるためであろうか。

#### 【谷川】

タニガワ。

東中央通りを中心に、谷川に添った長い小字になっている。

タニガワとは何か。二説を挙げる。

- ①タニガワとは「谷間を川が流れているところ」か。
- ②あるいは「タニガワという川が流れているところ」をいうか。

全国地図にはタニガワ地名は40ヶ所に中・大字として挙げられており、うち39ヶ所には「谷川」の文字が宛てられている。

#### 【濱井場】

ハマイバ。

野底川に沿った右岸の長い小字になっている。対岸は上郷で、野底川が境界である。

ハマイバとは何か。二説を挙げる。

- ①ハマイバとは「ハマ(破魔)・ウチ(打)神事が行われていた場所」をいう。神事は後に遊戯になったが、場所は変わっていないと思われる。破魔打は正月の年占で、一年の吉凶をこれで占った。二組が対抗して勝負をする。一方が藁や樹枝などで丸く作った破魔矢の的を投げころばすと、相手が木の枝を投げてさえぎり、境界線を越えると勝つ。ハマイバは多くが村はずれや浜であるという。(以上は民俗大辞典)
- ②ハマイバは、ハマ(岨)・井(井)・バ(場)で、「崖のある川のそば」をいうか(語源辞典)。

全国地図には、ハマイバ地名は13ヶ

所が中・大字として挙げられているが、伊那谷南部には多い小字名である。

#### 【棚田】

タナダ。

東中央通りの路が大きく曲がる場所にある小字で、現在はほとんどが住宅地になっている。

タナダとは何か。二説を挙げておきたい。

- ①タナダ(棚田)とは「急な傾斜地を耕して階段状に作った田のあるところ」をいう。この小字が発生した当時には、こうした状況になっていた可能性はある。
- ②タナダ←タナ(棚)・タ(処)で「階段状になっているところ」を意味することも考えられる。

全国地図には、タナダ地名は11ヶ所が中・大字として挙げられており、その全てに「棚田」の字が宛てられている。

#### 【谷川原】

タニガワラ。

オークラボウルの南隣にあつて、タニガワ小字に囲まれた小さな小字である。

タニガワラとは「谷川の川原」で、周辺より少し高くなっているのかもしれない。谷川がつくった微高地であろうか。

全国地図には、タニガワラ地名もタニカワラ地名もタニガワハラ地名も記録されていない。

#### 【かが沢・加々澤】

カガサワ。

カガサワは野底川に注ぐ支流である。野底川が曲流する所にもカガサワ小字がある。

カガサワとは何か。二説を挙げる。

- ①カガはカケ(欠)の転、またはカ(欠)・ガ(処)で「崩崖」のこと(語源辞典)。カガサワとは「崩崖のある谷川が流れている所」をいうか。
- ②カガは動詞カガム(屈)の語幹で「折

れ曲がった地形」をいうか。従って、カガサワとは「屈曲している谷川の流れている所」をいうにであろうか。

全国地図には、カガサワ地名は3ヶ所が中・大字として挙げられており、いずれも「加賀沢」の文字になっている。

#### 【藤内平】

トウナイダイラ。

JR 飯田線を跨いで野底川右岸の沿岸に添った長い小字である。

トウナイとは固有名詞か。であれば、トウナイダイラとは「藤内の屋敷か所有地のあった所」であろう。

当然ながら、トウナイダイラは全国地図には無い。

#### 【羽場】

ハバ。

羽場から箕瀬にかけて、四ヶ所に、この小字がある。ほとんどが段丘崖の縁になっている。

ハバはハバ(岨)で「崖」をいう(国語大辞典)。群馬・山梨・長野・岐阜の方言であるという。

全国地図には、ハバ地名は、40ヶ所の中・大字として挙げられている。

#### 【大久保】

オオクボ。

この小字内には飯田市役所があり、他方では王竜寺川の谷にもつながっている。

オオクボのオオ(大)は美称であろう。従って、オオクボとは「窪地のあるところ」をいう。窪地は王竜寺川の谷を指しているものと思われる。

全国地図には、オオクボ地名は337ヶ所も中・大字として挙げられている。

#### 【長屋前】

ナガヤマエ。

この小字は、箕瀬と大久保の二ヶ所にある。

ナガヤマエとは字面の通りで、「長屋の

前方の土地」をいうのであろう。

長屋は「長い一棟の建物をいくつにも区切り、一区切りごとに一戸とした住宅。武家屋敷のものには下級武士や中間(ちゅうげん)などが住み、町屋では多くこれを貸家とする」という(国語大辞典)。ここには下級武士が住んだ長屋があったのであろう。

全国地図には、ナガヤマエ地名は記載が無い。

#### 【薬師裏】

ヤクシウラ。

この小字は飯田市役所の南隣にある。

ヤクシウラとは「薬師堂の裏側の土地」をいうのであろう。

江戸時代の飯田城下図(飯田・上飯田の歴史 上)をみると、この小字の近くに薬師堂があったことがわかる。

#### 【ボタ下】

ボタシタ。

箕瀬の国道256号線の北側にある小字。

ボタは方言で下伊那郡や北設楽郡では「田畑の畦」を意味するが、単に「どて」をいう場合もある(国語大辞典)。従ってボタシタとは「どての下で低くなっている所」をいうのであろう。

全国地図には、ボタシタ地名は載っていない。

#### 【十王前】

ジュウオウマエ。

この小字は箕瀬の飯田段丘縁にある。

ジュウオウマエ(十王前)とは「十王堂の前の方の土地」をいう。

十王堂のあった所は『17世紀初期の飯田城下図』(飯田・上飯田の歴史 上)によれば、箕瀬(羽場)柘形の北西側になっており、「十王前」小字が柘形の南東側にあるので、柘形を挟んで対称的に位置している。



全国地図には、ジュウオウマエ地名は記載が無い。

#### 【元龍翔寺】

モトリユウショウジ。

この小字は、大久保町にあり、国の合同庁舎や飯田拘置支所を含む広い面積になっている。

伊那神社佛閣記によると、龍翔寺は寛文四年(1664)に、大横町からここ(箕瀬となっている)に移り、時期は不明であるが、さらに伝馬町に移転している。

モトリユウショウジとは、むろん「龍翔寺があったところ」を意味する。

#### 【ツクツキ】

この小字は白山通りの飯田段丘の南端で松川溪谷段丘崖の縁にある。

ツクツキとは何か。語源辞典によりながら考えていきたい。ツクは動詞ツク(尽)の連用形が名詞化した語で「それが尽きる所」から「台地の端の崖になる所」をいい、ツキは動詞ツク(突)の連用形で「台地」をいう。

以上から、ツクツキとは、「台地の端で段丘崖の縁」をいうのであろう。

#### 【新町】

シンマチ。

現在は東野の隣接区である大門町にあったと思われる。

シンマチとは、文字通り「新しくできた町」を意味するが、マチには次に二通りの意味がある。

①「建物が集まっているところ」(語源辞典)というのが一般的な理解であろう。その建物は住宅であったり、商店であったりする。

②この小字発生時には、そんなに建物がなかったのではないか、という考えもある。とすれば、マチとは「区画した田地のあるところ」ということになる。野底川から、すでに寺井が引かれていたとす

れば、この解釈が成り立ちそうだ。

#### 【野底】

ノソコ。この小字も昭和33年(1958)の『下伊那地名調査』には上飯田火が押ノの小字として記載があるが、現在は東野地区外の大門町に二ヶ所ある。

ノソコとは何を意味しているのか。語源辞典によりながら二説を挙げたい。

①文字通りの解釈では、ノ(野)・ソコ(底)である。ノは「緩傾斜地」をいい、ソコは「窪地」を意味する。川の浸食で谷になっていることをいうのであろうか。

②ノソはこの地方でよく使われていたノセの転じた語で「傾斜地」をいうか。コは接尾語で「場所」を示す。以上から、ノソコとは「傾斜地になっているところ」をいう。

国土地理院の2.5万分の1の全校地図には、4ヶ所に中・大字として挙げられており、すべてに「野底」の字が宛てられている。

#### 【松ヶ崎】

マツガサキ。

これは柏原溜池を含む丘陵の先端部にある、大きな小字である。

マツガサキとは何か。マツは自生しているアカマツを指している。サキはサキ(先)で「突き出た部分」(広辞苑)であろうか。従って、マツガサキとは「赤松が自生して林になっている丘陵の突き出た部分」をいうのであろう。

全国地図には24ヶ所に、中・大字として挙げられている。

#### 【水割】

ミズワリ。

この小字は柏原溜池の下流側にある。井水の水量を公平に分ける場所となっている。この小字の位置からみて、上飯田大井と中井に分けているのであろう。

水田耕作者にとっては田に引く水は生

命線になっていて、水争いは水田地帯にはつきものであったという。

全国地図には、ミズワリ地名は中・大字として1ヶ所にしかないが、この地方では竜丘にもミズワリ小字があり、工夫された石造の装置は今でも生きている。

#### 【宮ノ上・宮ノ前】

ミヤノウエ・ミヤノマエ。

いずれも大宮諏訪神社の周辺にある。ミヤノマエ小字は、地区外の大門町にも一ヶ所ある。

ミヤノウエとは「大宮神社の上の方にある土地」であり、ミヤノマエは「大宮諏訪神社の前の方にある土地」をいう。

大宮諏訪神社は、多くのお宮がそうであるように、南面している。ミヤノウエ小字はお宮の下の方になる。

国土地理院の全国地図には、ミヤノウエ地名は29件で、94件のミヤノマエ地名の三分の一に満たないのは、神聖な場所のウエであることに配慮しているためであろうか。

#### 【三月野】

ミツキノ。

この小字は、東新町の環状交差点と大宮諏訪神社の鳥居の間に、かたまっている。現在は三ヶ所に分断されているが、かつては繋がっていたのであろう。

ミツキノとは何か。難しい小字である。全国地図には一件も載っていないというのは、珍しい地名なのか、あるいは中・大字にはなりにくい地名なのか。

四説を挙げておきたい。

①ミツキノとは、ミツギ(貢)・ノ(野)か。ミツギとは、古くはミツキといい、神々への供物であった(国語大辞典)。従って、ミツキノとは「神々への熊内にかかわる緩傾斜地」を意味する。大宮諏訪神社のすぐ前にあり、そこでは例祭の度に供物の材料を集めて神事の準備をした

建物があったのかもしれない。神事・祭の終了後には、参加者が供物を共同飲食したというので、飲食量は少なくなかったと思われる。

②時代がかなり遡ることが気になるが、ミツギはミツギ(調)で、律令制下の賦課を意味する(国語大辞典)。すなわち、ミツキノは「調の超善意かかわっていた緩傾斜地になっている所」であろうか。例えば、麻布の製作所があったとか、あるいは麻を栽培したところとか。麻布は信濃の代表的な産物であった。中世末まで地名として残っていたのかもしれない。

③ミツキノは、ミ(接頭語)・ツキ(築)・ノ(野)で「高い所」をいう(語源辞典)。接頭語ミ(御)は「尊敬」を示す。ミツキノとは「緩傾斜地で神聖な、少し高くなっている所」をいうか。

④ミツキノはミ(水)・ツキ(漬)・ノ(野)で、「水の漬くこともある緩傾斜地」かもしれない。野底川からは少し距離はあるが、大雨のときに土石流がながれた可能性も否定できない。

#### 【西浦】

ニシウラ。

この小字は、ミツキノの南にあり下流側になっている。ただ、小さなニシウラ小字が上流側にも一ヶ所ある。

ニシウラとは何か。「西の方にあるウラ」としたいが、何の西になるのか、はっきりした対象物がない。語源辞典によって、二説を挙げる。

①ニシは動詞ニジル(躓)の語幹が清音化した語で、「崩壊地形、浸食地形」をいう。ウラはウラ(末)で「末端部」のこと。以上から、ニシウラとは「土石流の末端部になった所」か。

②ニシは動詞ニジム(滲)の語幹が清音化した語と考えると、ニシウラとは「湿地の末端部」となるが、どうであろうか。

## 【東野】

ヒガシノ。

ミヤノマエ小字の南側に広がる広い小字で、そのまわりにもあちこちに小さなヒガシノ小字がある。

ヒガシノとは何か。素直に考えれば、「東の方にある緩傾斜地」ということになる。西の方の大休にはニシノハラ（西ノ原）小字がある。この「西ノ原の東の方にある野」と思われる。「原」と「野」の違いはあるが、双方とも「ほぼ平坦地」の意であることから、この解釈でとおそうだ。

このニシノハラ小字の後にヒガシノ小字が発生し、やがて中字に出世したのであろうか。

全国地図には、ヒガシノ地名は36ヶ所に中・大字として挙げられているが、その一つは2.5万分の1の「飯田」にある。

## 【菅沼】

スガヌマ。

これも大宮諏訪神社の南側、下の段にある。この小字には、飯田東中学校グラウンドや飯田市武道館がある。

スガヌマとは何か。二説を挙げる。

①スはス（州）で「押し流されて堆積した土砂」をいう（国語大辞典）。愛知県の方言であるという。ガは格助詞。以上から、スガヌマとは「土石流で堆積した砂地で湿地になっている所」をいうか。

②スガは動詞スガフ（次）の語幹で「食い違う」意から「段丘、段差のある地」をいう（語源辞典）。すなわち、スガヌマとは「段差がある湿地」を意味するか。

国土地理院の全国地図には、スガヌマ地名は、中・大字として30ヶ所が記載されている。

## 【神明・神明前】

シンメイ・シンメイマエ。

この小字は宮ノ上段丘の南縁に二ヶ所あり、ミヤノウエ小字に囲まれている。シンメイマエ小字は、シンメイ小字の下方に、これも二ヶ所ある。

神明には二つの意味がある。一つは「神・神祇」をいい、もう一つは意味を限定して「祭神としての天照大神の称、また、それをまつた神社」とする（国語大辞典）。前者であれば大宮諏訪神社のことになるし、後者であればここに神明社があったのであろう。

神明（伊勢）信仰は、中世以降、御師によって組織された講を中心に参宮が進められ広い人々の間に広まっていった。民衆が伊勢神宮に望んだのは豊作の願いだけでなく至福・長命・武運など多方面に及んだ。こうした民衆の願望は内宮・外宮に直接向けられるより別宮などの末社を対象にしていたが、これらの末社は明治になり、淫祠としてすべて排除された（民俗大辞典）。

この地にも、伊勢神宮の末社が勧請されていたが、明治になって排除されてしまったのであろう。

全国地図には、シンメイ地名は36ヶ所に中・大字として残されている。

## 【地蔵清水】

ジゾウシミズ。

シルクホテルの南東側にある小さな小字。

ジゾウシミズとは「地蔵尊を祀っている自然湧水地」をいうのであろう。

大宮諏訪神社の段丘麓にあり、自然湧水のありそうな所。そこにお地蔵様が安置されていたのであろう。

地獄の責め苦を罪人に代わって受ける地蔵の献身は、中世以降、現世における身代わり地蔵として、武士をはじめあらゆる階層の人々の渴望するところとなり、民衆の現世利益への期待は各地に地蔵霊

場を出現せしめ、地蔵像の造立が相次ぎ、民間には個人祈願と併行して講組織による地蔵信仰が行われてきた。民間の地蔵講は教団や寺院を離れた地域社会における女人中心の信仰集団である。地蔵をめぐる民間信仰はきわめて複雑な様相を呈しているが、古い土着の信仰がその仏教的粉飾の素地をなしているという（民俗大辞典）。

明治維新の前後は、お地蔵様もまた受難の時期であった。

#### 【横井下】

ヨコイシタ。

大宮諏訪神社の下段にあり、ジゾウシミズ小字の周辺とその東方に4ヶ所、ほぼ等高線に沿って分布しているが、さらに下流側の南の方には広大なヨコイシタ小字がある。

丸山地区には横井という井水があるが、この井水は松洞川に流れ込んでいるので、東野地区には流れていない。

ヨコイシタとは、「等高線に沿うようにして流れている井水に下方にある土地」であろうか。むろん、全く等高線沿いに水路を作っても水は流れないので、幾分は等高線を切るように水路をあけてある。等高線をほぼ直角に切る彷徨がタテ（縦）であり、ヨコ（横）は、等高線に沿う方向をいうのであろう。

『飯田・上飯田の歴史（上）』の井水水系図によれば、ここ東野の横井に該当する井水は、寺井か小島井になりそうだ。あるいは、これらの二本をまとめて横井というのかもしれない。

全国地図には、ヨコイシタ地名は載っていないが、ヨコイ地名は11ヶ所にある。

#### 【飼料畑】

シリョウバタ。

この小字は吾妻町の中電北側にある。

シリョウバタとは何をいうのだろうか。三説を挙げておきたい。

①文字通りで、シリョウバタとは「馬の飼料にするトオモロコシやオオムギなどを栽培していた畑」であろうか。

②シリョウバタ（私領畑）で、「藩主などから私有を許された畑」であったかもしれない。飯田には武士の耕作する畑があったと聞く。

③シリョウ←ジリョウ（寺領）と清音化した語で、「寺院が所有していた畑」の可能性もある。

全国地図には、シリョウバタ地名もシリョウハタ地名も載っていない。

#### 【柏原】

カシワバラ。

中央道の西側、風越高校の東側にある傾斜地。

カシワバラとは何か。二説を挙げる。

①カシワ←カシ（傾）・ハ（端）と転じた語で、ハラ（原）は「開墾地」をいう（語源辞典）。すなわち、カシワバラとは「開墾地縁辺の斜面」を意味するか。

②カシワは落葉高木のカシワ（柏）で、ハラ（腹）は「山腹」をいうのかもしれない。従って、カシワバラとは「柏が自生している山腹」か。柏の葉は、上代には飲食物を盛ったり、祭祀具としても使われたという。樹木は薪炭用で、樹皮はタンニン染色に利用されたという（国語大辞典）。

全校地図には、カシワバラ地名は36ヶ所に中・大字として記載がある。

#### 【細田】

ホソダ。

中央道とミヤノウエ小字に挟まれている。

ホソダとは何か。二説を挙げる。

①ホソダとは字面の通りで、「細長い形をした田んぼのあるところ」をいうか。

②ダはダ(処)で、「細長いところ」をいうか。

全国地図には、ホソダ地名は35ヶ所にあり、いずれも「細田」の文字を宛てている。

#### 【大西】

オオニシ。

カシワバラ小字の下側にあり、中央道を跨いでいる。

オオニシとは何を意味するのか。語源辞典に依りながら、三説を挙げる。

①オオ(大)は「程度の甚だしい」を意味し、ニシは動詞ニジル(躓)の清音化した語の語幹で「崩壊地形」をいう。すなわち、オオニシとは「大きく崩壊した所」をいう。

②オオ←アフ(アブ)の転じた語で「崖」をいい、ニシは動詞ニジム(滲)の語幹の清音化した語で「湿地」のこと。つまり、オオニシとは「崩崖のある湿地」をいうか。

③オオは美称。オオニシとは「(お宮の)西の方にある土地」であろうか。

全国地図にはオオニシ地名は、57ヶ所にも及ぶ。

#### 【高田】

タカダ。

飯田線に沿った飯田駅の北東側でセンゲン小字の西側にある。隣接区になる上飯田にも広がっている。

タカダとは何か。語源辞典によりながら、四説を挙げる。

①タカは「限度。限界」のことで「台地の端」を意味する。ダはダ(処)。すなわち、タカダとは「台地の縁になる土地」をいうか。

②タカ(高)・ダ(処)で、単に「周辺よりも高い所」を意味するか。タカダは瑞祥地名でもある。

③タカはタカ(鷹)で、「鷹狩に関わる地

名」である可能性も。

④タカは動詞タガウ(違)の語幹で「食い違った地形」をいうか。すなわち、タカダとは「段丘になっているところ」を意味するのであろうか。

国土地理院の全国地図には、タカダ地名は109ヶ所が中・大字として記載されている。

#### 【羽根垣外】

ハネガイト。

この小字は飯田駅の東側一帯になる。ハネガイト小字の北西側は飯田線になっているが、ここを掘り下げて飯田線を敷設したのではなくて、もともと南の松川に開口する谷であったと思われる。

ハネガイトとは何か。これも語源辞典に依りながら、二説を挙げたい。

①ハネはハネ(芻。撥)で「切り落とす」の意で、カイトは「限られた一区画の土地」のこと。つまり、ハネガイトとは、「切り落としたような崖になっている台地の一画」を意味するか。

②ハネはハニ(埴)の転じた語で「黄赤色の粘土」を意味する。従って、ハネガイトとは「赤土になっている土地の一画」をいうか。

全国地図には、ハネガイト地名は一ヶ所もないが、ハネ地名は24ヶ所にある。

#### [参考資料]

1. 楠原佑介・溝手理太郎『地名用語語源辞典』東京堂出版 1983
2. 新村出『広辞苑 第六版』岩波書店 2008
3. 日本大辞典刊行会『日本国語大辞典』全10巻 小学館 1981
4. 福田アジオ『日本民俗大辞典』吉川弘文館 2000
5. 下伊那教育会『下伊那史 第六巻』

下伊那誌編纂会 1980

6. 飯田市歴史研究所『飯田・上飯田の歴史 上』飯田市教育委員会 2012
7. 遠藤元男『日本職人史の研究』雄山閣 1961
8. 刊行委員会『丸山誌』丸山公民館 2000
9. 編集委員会『羽場曙友会誌』羽場曙友会生産森林組合 1984